ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 14 号

福知山市石本遺跡の調査……辻本　和美……1
石本遺跡出土の木製遺物……竹原　一彦……13
北金岐遺跡C地点の調査……田代　　弘……17
—昭和59年度発掘調査略報—……23
7. 田辺城跡第5次　10. 木津川河床遺跡
8. 千代川遺跡第9次　11. 隼上り3号墳
9. 長岡京跡左京第115次　12. 燈籠寺遺跡
府下遺跡紹介　24. 御土居　25. 淀の城跡……32
長岡京跡調査だより……40
センターの動向……44
府下報告書等刊行状況一覧……46
受贈図書一覧……50

1984年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版1　石本遺跡

(1)　A地点調査地全景（南から）　大溝掘削前

(2)　A地点調査地全景（北から）　大溝

図版2　石本遺跡

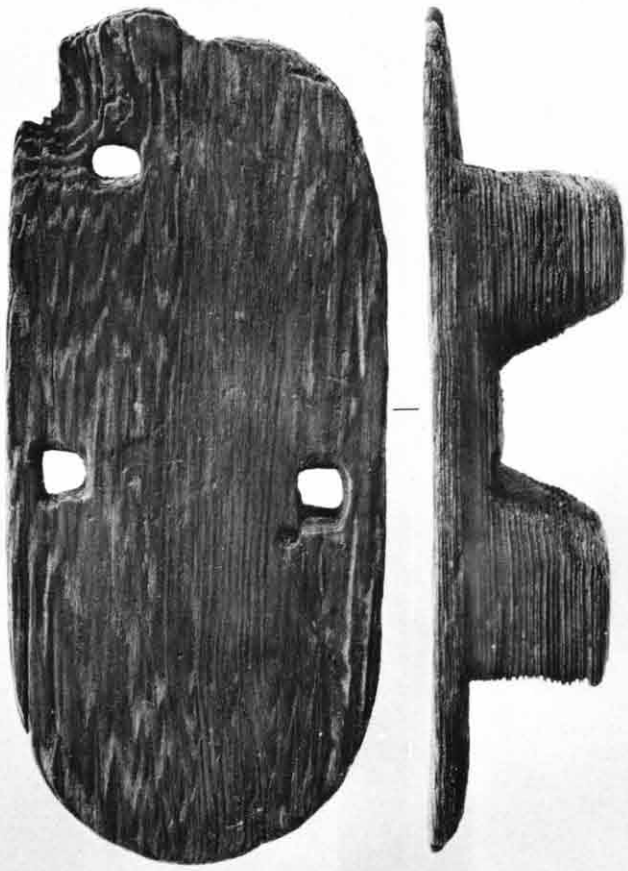
(1)　8号住居跡

(2)　大溝堰跡

図版３　　石本遺跡出土の木製遺物

1

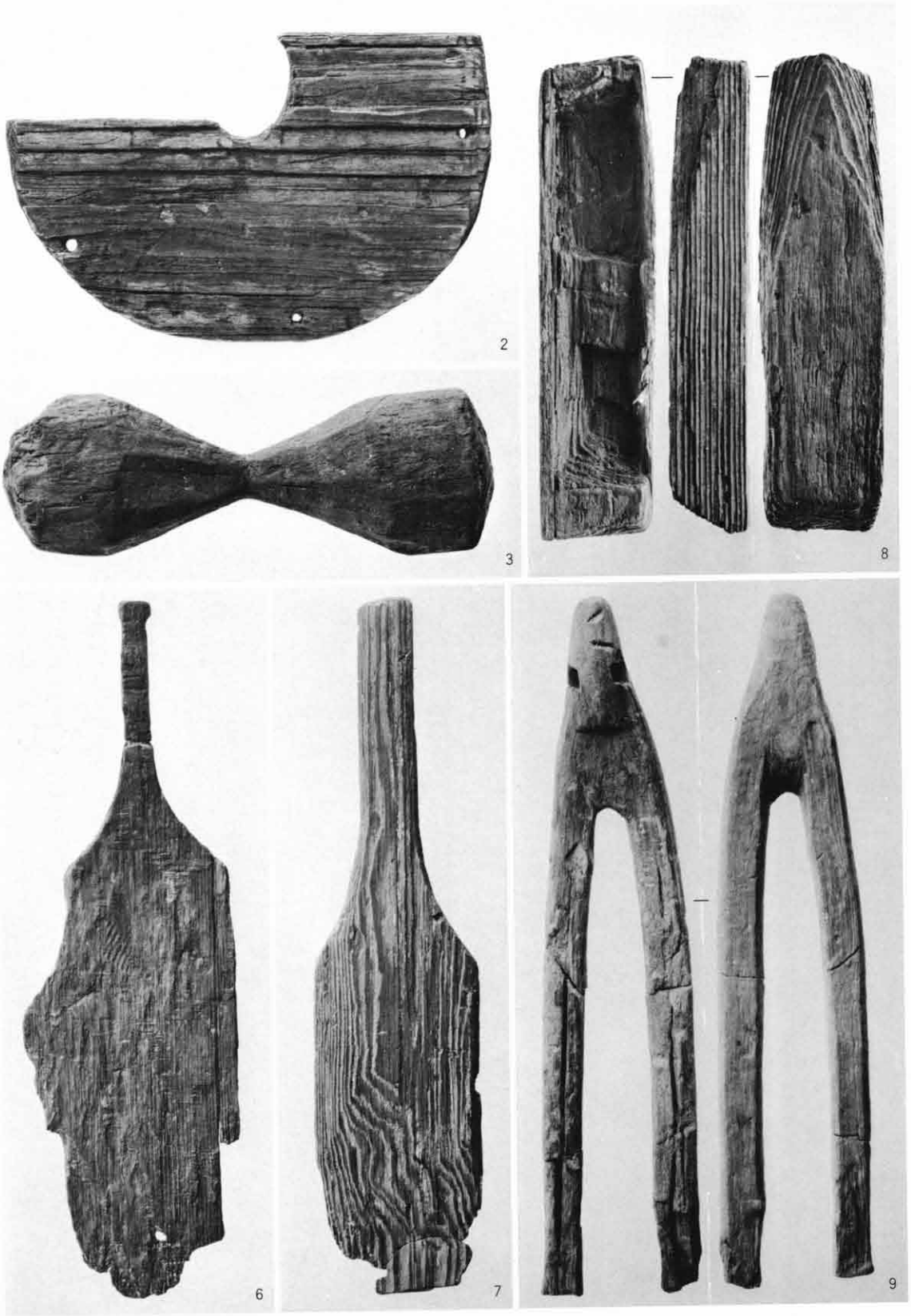
4



5

１．鞍　４．火鑽臼　５．下駄

図版４　　石本遺跡出土の木製遺物



２．有孔円板　３．槌の子　６・７．鋤　８．舟形木製品　９．二叉状木製品

福知山市石本遺跡の調査〈図版1・2〉

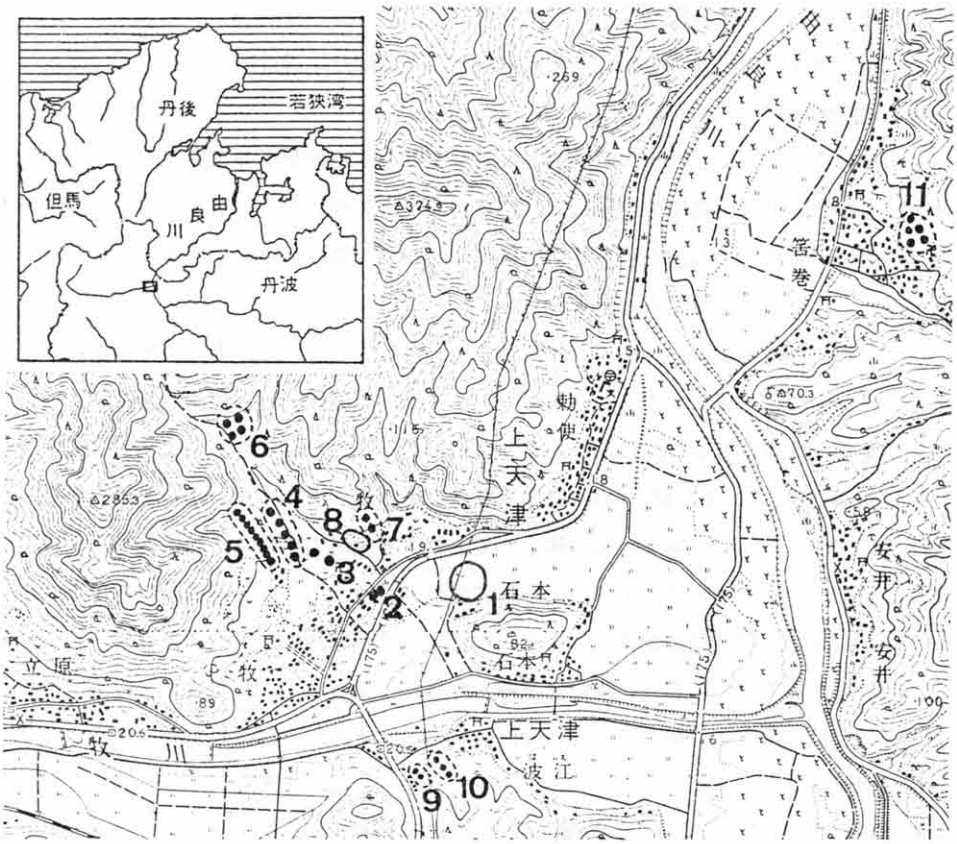
辻　本　和　美

1. はじめに

ここに紹介する石本(いしもと)遺跡は，当調査研究センターが昭和59年3月から9月にかけて発掘調査を行った遺跡で，調査の結果，方形周溝墓や円形竪穴式住居跡などの弥生時代の遺構をはじめとして，古墳時代後期の方形竪穴式住居跡群，奈良時代の掘立柱建物跡さらに中世に至るまでの長期にわたる各種の遺構，およびそれらに伴う遺物が多数検出された。

また，今回調査の中で特に注目されることは，古墳時代後期集落に伴う大溝から，黒漆塗の鞍部材を含む約180点におよぶ木製品が検出されたことである。

以上を含め今回の発掘調査で確認されたさまざまな事例は，同じ福知山市域のみならず



第1図　石本遺跡周辺遺跡分布図(1/25,000)

1.　石本遺跡　2.　牧正一古墳　3.　弁財古墳　4.　道勘山古墳群　5.　樋ノ口古墳群
6.　平石古墳群　7.　岩田古墳群　8.　薬師遺跡　9・10.　波江古墳群　11.　狐塔古墳群

当地域が属する由良川水系においても初見となるものが多い。これらは，今後，当地域の歴史解明に具体的かつ貴重な資料となるものであるが，また一方で多くの新たな問題を我々に提供するものと思われる。

調査全般についての詳しい報告は，現在，緒に就いたばかりの遺物の整理作業が終った時点で改めて報告することにし，ここでは，調査成果および問題点等を踏まえながら，その概略について述べておきたい。

2.　石本遺跡周辺の環境（第１図）

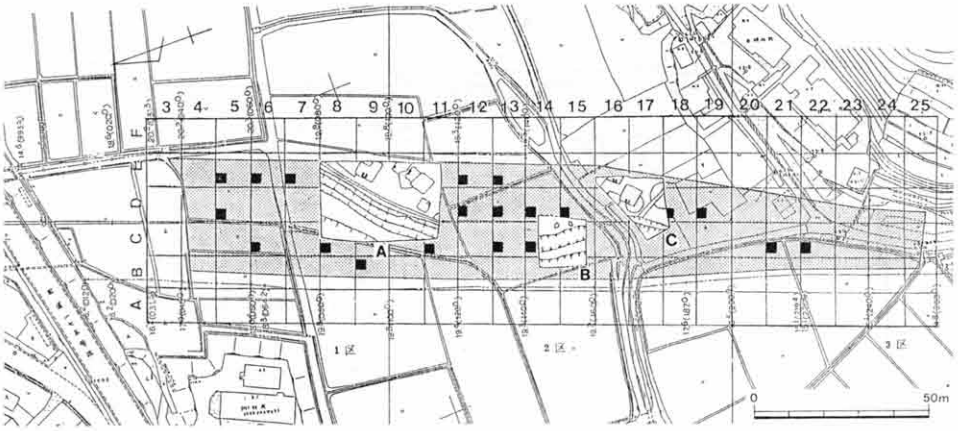
石本遺跡は，京都府北部に位置する福知山市の北郊，字牧および石本の両地区にまたがって所在する。この付近は，府北部第一の河川である由良川が形成した福知山盆地の出口部に位置し，また，西側から流入してくる牧川との合流点にあたる。遺跡は，この合流点付近の，水田地帯にとり残された格好の地光寺山と呼ばれる小孤立丘陵と牧集落が立地する段丘状の高台との間の狭隘な沖積平野の低地に位置する。

いま少し遺跡周辺の地形を詳しく観察すると，当遺跡は，周辺部よりわずかに高くなった微高地(標高 13.7 m)に立地していることがわかる。

この地域は，洪水位＋12 mの記録的な大洪水となった昭和28年の大災害を引き合いに出すまでもなく，従来由良川の氾濫により度重なる水害を被った。しかしながら，由良川本流や各河川の形成した谷筋を利用して交通路が開かれ，特に兵庫県の但馬方面などへの交通の要所として重要な位置を占めていた。

ここで周辺の遺跡をみてみると，当遺跡北西の丘陵先端部には，大正14年に調査され，墳丘内に二つの横穴式石室をもつ双円墳とも小形の前方後円墳とも推測される牧正一古墳や六環鈴鏡など豊富な副葬品が出土した弁財古墳があり，さらにそれら著名な古墳を含めた総数30基前後(３～４支群に分れる)からなる牧古墳群が所在する。不明な最高所の一群を除いてすべて横穴式石室を内部主体としており，６世紀中葉から７世紀前半にかけて，順次築造形成された群集墳である。この牧古墳群の分布する丘陵下位の平坦部には，多量の土錘が出土する薬師遺跡がある。また，牧正一古墳の墳丘内からも，調査中，弥生土器・土師器等が採集されており，周辺に遺跡の存在が推測される。この牧正一古墳は，牧古墳群中最も低い位置に立地しており，今回調査した石本遺跡とは至近距離にある。両者の密接な関係がうかがえる。

福知山盆地全体でみると，当地域は地理的にも遺跡分布のあり方からも一つの完結したまとまりをもつ地域といえよう。



第2図 調 査 地 位 置 図

3. 調 査 の 概 要

石本遺跡は，日本海に面する宮津市と内陸部の福知山市を結ぶ宮福線鉄道建設に伴う予定路線内の分布調査によってはじめて確認された遺跡である。発掘調査は，日本鉄道建設公団の依頼を受け，延長約 220 m・最大幅 40 m の路線予定範囲内において実施した。

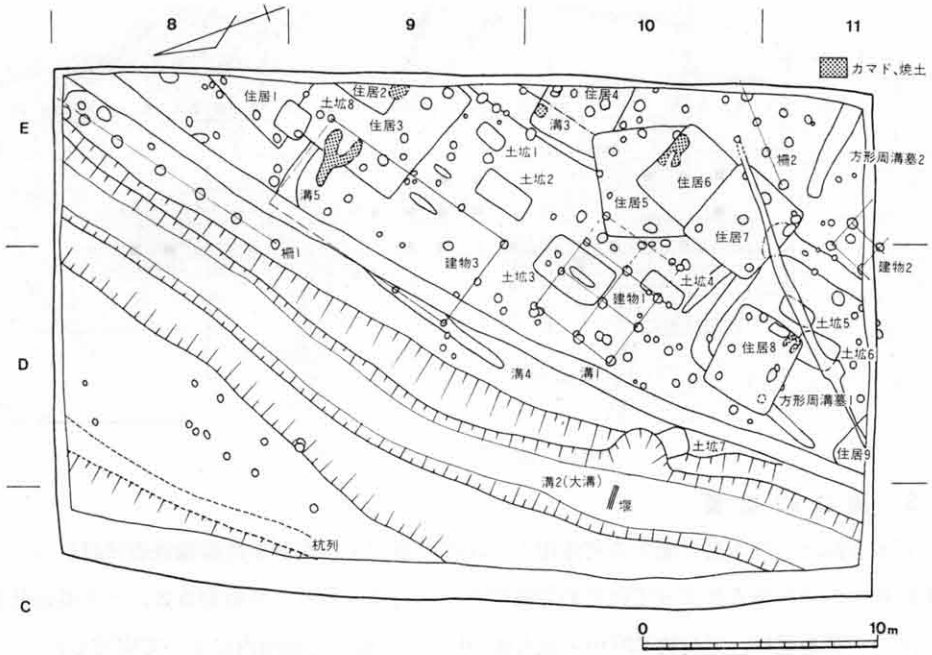
従来，未確認の遺跡であったため，まず昭和58年度は，遺構の有無および遺構が検出された場合その時期・性格・範囲等を把握することを目的として試掘調査を実施した。

調査の実施にあたっては，鉄道建設用の路線センター杭を利用し調査地全域を 10 m の方眼に区画したのち，南北軸を数字，東西軸をアルファベットの記号で割り付け，それぞれの組み合わせによって地区名を呼称するという方法をとった。また，実際の掘削にあたっては，この 10 m の基本区画毎に一辺 3 m 四方の試掘グリッドを最低一箇所ずつ開けて行くことにした。なお，昭和58年度は府北部の記録的な豪雪のため，現地の着手が大幅に遅れ，翌年度に試掘調査を継続することになった。

この試掘調査の結果，現地表下 70～80 cm の深さで遺構とおぼしき土色の変化が認められたため，これらの確認された地点を中心に掘削範囲の拡張を行った。今回の調査では，北から A・B・C と呼称する地点がそれに当る(第 2 図)。以下，各地点毎に検出した遺構の概略を述べることにしたい。

(1) A 地 点

A地点は，今回の調査地内では最も広い調査面積をもち，各遺構も異なった時期のものが同一面で複合した状況で検出された。前段の試掘調査の結果によれば，当地点の北側(3区以北)および西側(D区以西)については，現在の水田耕作土のすぐ下に青灰色粘質または灰褐色の砂礫を含む層位が確認されており，近年まで，池か沼沢状の湿地が広がっていたことがわかった。これは，現地形で観察される旧河道(牧川旧河道)の想定線とほぼ



第3図　石本遺跡A地点遺構平面略図

一致している。

当地点での遺構検出面は暗褐色粘質土層で，同遺構面は地光寺山の北麓から北・西方向に向って舌状に張り出しており，A地点はこの張り出し部の先端に位置する。

当地点からの検出遺構としては次のものがある（第3図）。

＜時　期＞	＜遺構の種類（数）＞
弥生時代	方形周溝墓（2基）　溝（3条）　方形土坑（7基）
古墳時代(後期)	方形竪穴式住居（9基，建て替えを含む）　溝（2条） 土坑（1基）　柱穴状ピット（多数）
奈良時代	掘立柱建物（2棟）　柵列（1条，不明1）　溝 柱穴状ピット（多数）
平安～室町時代	掘立柱建物（1棟）　耕作溝・柱穴状ピット
近・現代	水路護岸杭列　暗渠排水溝　自然流路
	その他時期不明のピット多数

上記の内，方形周溝墓は，一辺の溝が約7mの規模をもつもので，隣合う周溝墓と一辺の溝を共有する連接タイプの平面形態をとっている。この2基の周溝墓の北側には長方形の土坑群が分布する。最大のもので長さ3.44m・幅1.72mを測り長軸の方向を揃える。それぞれの土坑内からは数点の弥生土器の小片が出土したのみで，棺等の痕跡は，残存し

ない。なお，古墳時代の竪穴式住居などにより削られ不明な部分が多いが，この土坑群をとり囲むかのように溝が存在する。墓域を画するものか。

周溝墓・土坑(墓)の時期は，後述するB地点の周溝墓溝内から検出された供献壺から類推して弥生時代の中期後半に所属するものと考えられる。

古墳時代の遺構群は，主に方形竪穴式住居によって構成され，前代に変って一転して集落跡の様相を呈す。方形竪穴式住居は，最大の規模をもつもの(3号住居)で一辺約5.6m，最も小型のもの(8号住居)で約3.1mを測る。今回検出した住居跡の多くは，住居壁一辺の中央付近に馬蹄形の造り付けカマドをもつが，小型の住居跡では住居の隅に寄せて付設している。このようにカマドを隅に造る例は，本例とやや異なるものの同由良川水系の綾部市青野遺跡に多くの類例がみられ，俗に青野型住居跡と呼ばれている。今回の検出例などは青野型住居の系譜を考えるうえに一つの参考となろう。また，室内の空間利用のあり方など今後の課題である。建て替えや上面の削平により遺存状況等はかならずしも良好ではないが，張り床(3号住居)，貯蔵穴(8号住居)，炉，置石などをもつものもみられる。

これらの住居群は，3ないし4つのグループに分けることができ，中央の一群(4～7号住居)では，先に建てられた住居の位置を踏襲しながらも少しずつ南側に移動させ，合計4回に及ぶ建て替えが行われている。

住居跡群の西側部分には，調査地の南西隅から北東隅にかけて，外側にゆるやかなカーブを描く大小2条の溝が延びている。東側の溝(溝1)は，上肩幅0.6～1m・深さ0.4～0.6mを測り断面逆台形状を呈する。大溝(溝2)の中央南寄り部分には，溝幅が東に張り出す箇所があり，この部分の溝底から人頭大の石と板材・杭を組み合わせた井堰状の遺構が検出された。大小両溝からは，石塊が転落したかのような状態で多数出土しており，憶測ではあるがこの二つの溝に挟まれた間隙部に，一部に礫石を利用した堤防状の施設が本来存在した可能性が考えられる。後になって，この部分には柵列が付加される。この両溝，特に大溝からは，須恵器・土師器等の多量の土器類に混って木製品・鉄製品さらに紡錘車等の石製品など各種の遺物が出土した。溝の開削時期であるが，溝1は，溝内出土の須恵器より6世紀後半～7世紀初頭に，大溝(溝2)は，前者より少し遡って6世紀中葉頃には開掘されていたものと考えられる。これらの溝は，奈良時代頃まで(大溝の最上層からは中世の土器片が検出されており，あるいはその当時まで凹みとして残っていたものと思われる。)その機能を果していた模様であり，その役割りについては集落の区画溝・防御・排水，さらに堰状の遺構からみて耕作地への導水・灌漑・輸送などさまざまな性格をもっていたものと推測できる。

今回調査地から検出した多数のピット群については各時期のものが混在しているが，現

在のところ建物としてまとまるのは3棟である。建物1は，南北2間(4.1m)・東西3間(5.3m)の総柱建物である。南半分が未調査の建物2も，ほぼ同様な円形の掘形をもち総柱建物と思われる。これら倉庫と考えられる建物は，方向・柱掘形など類似しており同時期に所属するものであろう。時期を決定する資料に欠けるが，ここでは一応奈良時代と考えておきたい。

奈良時代以降の遺構としては，先に掲示したものがある。なお，建物3では柱穴から黒色土器椀が出土している。

(2)　B 地 点

当地点は，後世の攪乱が激しく，そのため調査範囲を限定したため不明な部分が多い。

弥生時代(中期)　　方形周溝墓(1～2基)　土坑

古墳時代(後期)　　竪穴式住居痕跡　土坑(2基以上)

このうち方形周溝墓は，西半分を土取りにより削平されてしまっているが，東面の周溝内からほぼ完形の壺形土器が1点出土した(第4図1)。

古墳時代の遺構については，住居に付随するカマドかあるいは炉の痕跡と思われる焼土塊や，固く締った張り床状の施設など竪穴式住居跡の存在を示す一部遺構の検出に留まった。しかし，A地点および後述のC地点の間にも，以上の結果からみて一連の住居跡が広がることが確認できた。

(3)　C 地 点

C地点の調査は，遺跡の南への広がりを把握することを目的とした。当地点は地光寺山の北西斜面に位置しており，今回の調査地の中では最も高い場所を占める。

当地点で検出した遺構には，以下のものがある。

弥生(末期)～古墳(初頭)　円形竪穴式住居(2基)

古墳時代(後期)　　方形竪穴式住居(7基，建て替えを含む)　土坑(1基)

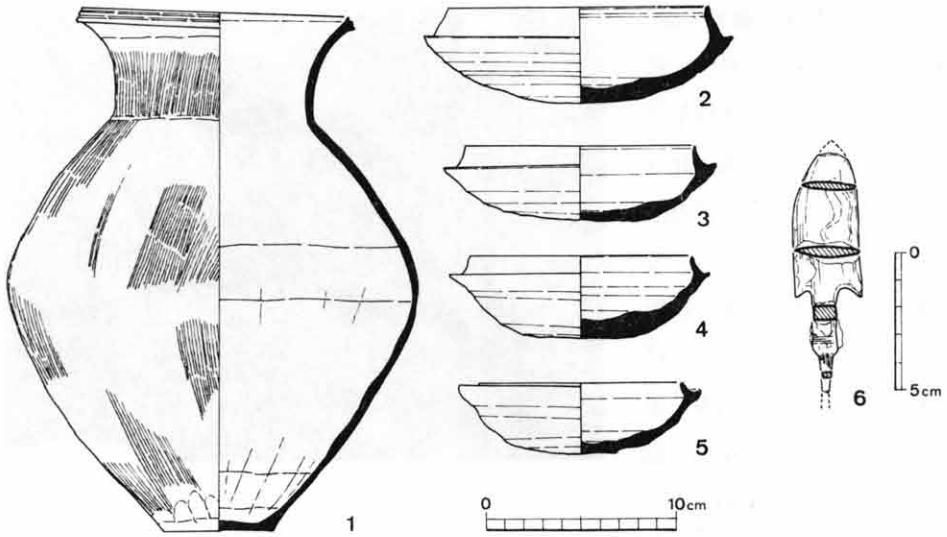
溝(新・旧2条)

奈良時代以降　　柱穴状ピット　自然流路など

上記の円形竪穴式住居は，出土土器によりいわゆる庄内期に属するもので，その内の1基からは，鉈と考えられる棒状の鉄器が計3点出土している。

古墳時代後期の方形竪穴式住居跡については，同一場所で4回以上にのぼる建て替えのみられるものがある。ここでは，新しい時期のものほど床面積が増加してゆく傾向が窺える。

住居跡群の南側で検出した溝は，南東から北西の方向に延びており新旧2回の改作が認められる。本溝については，その規模や形状，溝内出土遺物の類似からみて，A地点の溝



第4図 出 土 遺 物 実 測 図

1. 弥生土器壺（B地点方形周溝墓） 2～5. 須恵器杯身（A地点大溝） 6. 鉄鏃（3号住居跡）

1と関連するものと思われる。

このほか，住居跡に半分削平された格好の土坑を1基検出している。当土坑からは，6世紀前半頃に遡る須恵器杯身類とともに，土師質の移動式カマド(韓竈)片，土師器杯・甕破片などが遺棄された状態で出土した。土坑の埋土中には，若干の炭化物，獣骨と思われる骨片が含まれており，何らかの祭祀行為に用いたものを捨てたか，または埋納したかと考えられる。住居跡との切り合い関係からも，本土坑は，石本遺跡における古墳時代集落の成立時期の上限を決めるうえに一つの資料となろう。

4. 出土遺物について

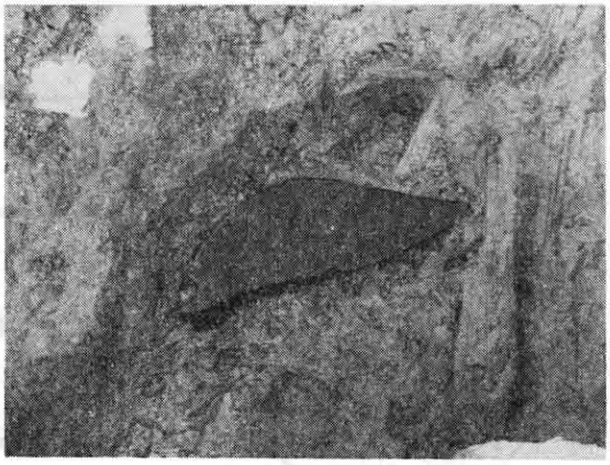
今回の調査で出土した遺物は，木器類を除いて整理箱で約150箱ほどあり，各種・各時期にわたっている。

出土の土器類の中には，縄文後期の土器片が数点見られ，当遺跡での人々の活動開始時期が縄文時代に遡ることが判明した。弥生土器では壺・甕など中期後半から後期末葉にかけての時期のものが多くみられる。

今回出土した土器類のなかでは，古墳時代後期に属するものが圧倒的多数を占めており，そのほとんどはA地点の大溝(溝2)中からのものである。溝内出土の土器には完形のものも少なくなく，集落内の出土土器としては器種が豊富なことがその特徴である。

同溝内から出土した木器類については，今後の整理を待つところが大きいが，現時点で感じる点を列記すると，第1に，農・工具(スキ・杵・槌の子・横槌・斧柄状・工具柄他)，

日常用品(下駄・織機具・櫛)，祭祀具（舟形・刀子形・火鑽臼・二叉状木器)，土木建築用材など全体の出土点数に比べて種類が豊富なことであろう。また，建築用材と思われるものを除いて小型品が多く，加工途中のものがあまり見かけられないこと。すなわち，製品として完成されたものが比較的多いことなどである。



第5図　鞍　出　土　状　況

今回出土木器類の中で特に注目を集めるものとして黒漆塗りの鞍が挙げられる。この鞍は，山形になった上縁部分を含む全体の1/3を残す破損品であるが，現存部分の長辺30cm・短辺9cmを測り略三角形状を呈する。厚さは，上縁端部で約1.4cm，下部の破損部分で約2.8cmであり，単純な平板でなく裾広がりの形態をとっている。堅い材質の木材を用いており，全面に丁寧な仕上げで黒漆が塗られている。日本古代の鞍は，鞍橋部とその前後に垂直して立つ前輪(まえわ)・後輪(しづわ)によって構成されるが，本例が前後どちらの「輪」に相当するのかは，現状では明らかでない。実用的な木製の鞍の出土例は，最近になりわずかずつではあるが知られるようになってきた。しかし，本例のような精巧な漆塗りのものは，たとえば，東大寺正倉院に伝えられるようなものを除いて，出土品としては極めて珍しく，また，時期的にも古い段階に位置づけられるものである。本例については，全くの実用品というよりも儀礼的な場で使用されたものと考えたい。

遺構の説明のところで少しふれたように，大溝中からの出土品には，木製品の他に鉄器類(鉄鏃・鎌・U字形鋤先)，石製品(砥石・紡錘車・碧玉製管玉・臼玉等の玉類)，土製品(紡錘車・土玉・小形手捏土器・大小の土錘)などがある。また，朝鮮半島や日本の弥生時代遺跡から出土する鹿角に平行線状の彫刻を施す彫骨品があり，総じて儀礼的色彩の濃い遺物が多い。このほか，牛や鹿の歯牙や角・骨等の動物遺体，桃核等の植物遺体が出土しており遺存状態も概して良好であった。

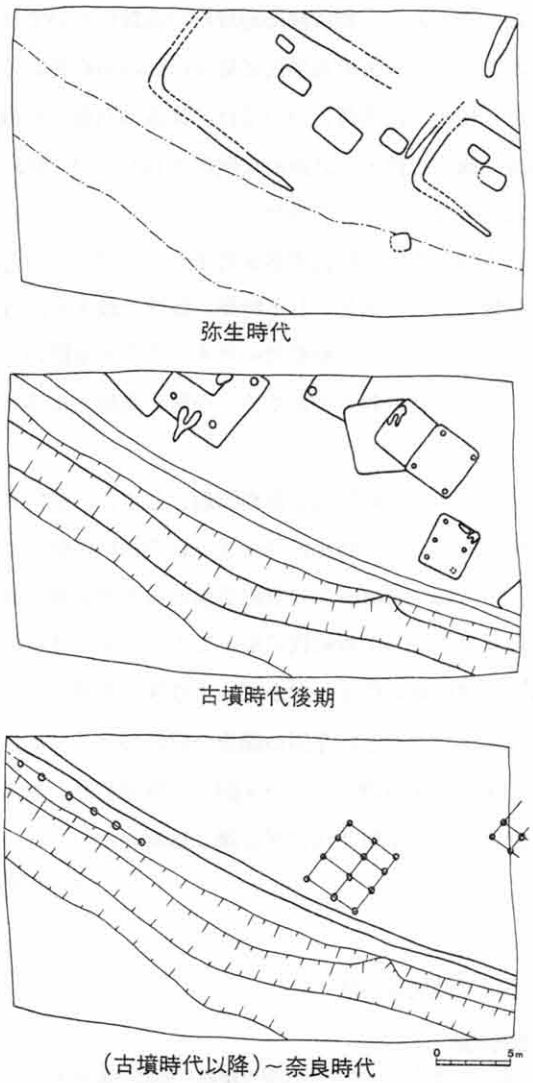
大溝以外からの出土遺物としては，A地点3号住居跡の平根式鉄鏃(第4図6)，同じく6号住居跡の匙型土製品，9号住居跡の滑石製臼玉，C地点円形竪穴式住居跡の鉄製鉋3点などが注意されるものである。

5. まとめ

最初にふれたように，今回の調査については当初の予想をはるかに上回る数々の成果があった。詳細については後日に期し，ここでは本稿のまとめとしてごく簡単に石本遺跡を取り巻く問題点を整理しておきたい。

まず最初に，弥生時代の遺構に関してである。今回検出した方形周溝墓については，由良川本流域では，舞鶴市志高遺跡で多くの調査例があり，最近の調査成果からも，当地域の弥生時代の墓制として通有のものであったことが判明している。ただ，A地点で確認された大型土坑(墓)群を取り囲む区画の溝については，類例に乏しく，今後検討を要する。

今回の調査地内では，これらの周溝墓と同時期の住居の跡は検出されていない。また，C地点で検出した円形住居跡の時期は，弥生時代末から古墳時代初頭と考えられ，今後，居住区の場所，墓域との関連など検討すべき点は多い。



第6図 石本遺跡変遷図

次に，古墳時代後期集落の問題である。当遺跡では，今回の調査により17基以上の竪穴式住居跡が検出され，その密集性とともに広範囲に広がることが判明した。由良川本流域では，これまで古墳時代後期の住居跡の検出遺跡として，下流から舞鶴市志高遺跡，同桑飼下遺跡，大江町三河宮ノ下遺跡，同高川原遺跡，綾部市青野遺跡，同綾中遺跡，同青野南遺跡，同久田山遺跡が知られている。これらのうち丘陵上に立地する久田山遺跡を除くほかは，すべて由良川の自然堤防上に位置している。この時代の自然環境がどの様なものであったのかを知る手だてはあまり多くないが，今後，集落立地のあり方などについては河川交通の問題からの検討も必要であろう。なお，各集落の成立時期や消長については若

干の差異があり，特に綾部地域内の遺跡については，7世紀前半代まで竪穴式住居が採用されており，6世紀後半代に集落活動の中心をおく石本遺跡と対比される。

今回検出した大溝については，集落の立地する微高地の縁辺部に沿って展開しており，集落の成立に伴って計画的に開削されたものと想定される。溝の機能については遺構説明のところで少しふれてみた。

石本遺跡の古墳時代集落が営まれた時期は，また，周辺遺跡のところでふれた牧古墳群が形成されたと推測される時期とほぼ一致する。古墳群自体の内容がいま少し不明確で推測の域を出ないが，被葬者の幾人かを石本遺跡の住人に求めることも，両者の地理的な関係からみて許されるであろう。今後，墓地と集落をつなぐ好例の一つになるものと思われる。

このほか，古墳時代集落の課題としては，竪穴式住居から掘立柱建物への移行時期，造り付けカマドと今回比較的出土点数の多い移動式カマド(韓竈)との関係およびその導入時期，さらに，集落内での祭祀を物語る各種遺物や食用あるいは犠牲としての獣骨の存在など，6世紀から7世紀代に限っても，さまざまな問題点が見い出される。これらについては，今後の整理作業のなかで，より深く究明していきたい。

最後になったが，今回の調査全般にわたって御理解・御協力をいただいた日本鉄道建設公団・福知山市教育委員会・同土地開発公社，および発掘作業に従事していただいた地元有志の方々，学生諸氏に対し深く感謝したい。

（辻本和美＝当センター調査課主任調査員）

関連遺跡掲載文献

志高遺跡

1. 杉本嘉美『志高遺跡調査概報』舞鶴市教育委員会 1981
2. 吉岡博之『志高遺跡―昭和56年度花ノ木・スドロ藪下地区および久田美地区の調査概要―』（舞鶴市文化財調査報告　第6集　舞鶴市教育委員会）1982
3. 吉岡博之ほか『志高遺跡―昭和57年度カキ安地区の調査―』（舞鶴市文化財調査報告 第4集 舞鶴市教育委員会）1983
4. 吉岡博之『志高遺跡―昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要―』（舞鶴市文化財調査報告 第7集　舞鶴市教育委員会）1984

桑飼下遺跡

渡辺　誠編『桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会 1975

三河宮ノ下遺跡

1. 竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会）1981

2. 竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

高川原遺跡

中谷雅治ほか「高川原遺跡発掘調査報告書」(『大江町文化財調査報告』第1集 大江町教育委員会) 1975

青野遺跡

1. 山下潔巳・川端二三三郎・中村孝行・鈴木忠司・釋 龍雄「青野遺跡A地点発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告』第2集 青野遺跡調査報告書刊行会) 1976
2. 増田信武・中谷雅治ほか「青野遺跡第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第3集 綾部市教育委員会) 1977
3. 増田信武・中谷雅治ほか「青野遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第4集 綾部市教育委員会) 1978
4. 中村孝行「青野遺跡第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981
5. 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
6. 辻本和美・増田孝彦・小山雅人「青野遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
7. 中村孝行「青野・綾中地区遺跡群の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第3号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982. 3

青野西遺跡

1. 小山雅人「青野遺跡第8次」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982. 12
2. 小山雅人「青野西遺跡の発掘調査について」(『京都府埋蔵文化財情報』第9号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983. 9

青野南遺跡

1. 中村孝行「青野南遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
2. 中村孝行「青野南遺跡第3次・第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第10集 綾部市教育委員会) 1983

綾中遺跡・綾中廃寺

1. 中村孝行・小山雅人「綾中廃寺第1次・第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981
2. 中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
3. 中村孝行「綾中廃寺第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第10集 綾部市教育委員会) 1983

久田山遺跡

大槻真純「久田山―久田山遺跡・久田山南遺跡発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告』第5集　綾部市教育委員会) 1979

牧古墳群

1. 梅原末治「牧の石室古墳」(『京都府史跡名勝天然紀念物調査報告』第20冊 京都府) 1940
2. 『新たに国の保有になった埋蔵文化財特別陳列目録』東京国立博物館 1965
3. 海老瀬敏正・笠井敏光「福知山地方の横穴式石室」(『京都考古』16 京都考古刊行会) 1975
4. 新納　泉「京都府下出土の装飾付大刀」(『京都考古』26 京都考古刊行会) 1982
5. 村川俊明「福知山市牧正―古墳測量調査略報」(『京都考古』27 京都考古刊行会) 1982
6. 西岡巧次・村川俊明「牧古墳群」(『丹波の古墳Ⅰ―由良川流域の古墳―』山城考古学研究会) 1983

全般に係わるもの

『京都府遺跡地図』京都府教育委員会 1972

『綾部市史』上巻 綾部市史編さん委員会 1976

『福知山市史』第1巻 福知山市史編さん委員会 1976

石本遺跡出土の木製遺物〈図版3・4〉

竹　原　一　彦

石本遺跡の発掘調査で出土した木製遺物は，すべてA地区で検出した水路状遺構の下層中より出土したものである。多量の木製遺物が出土したが，洗浄後に加工痕の有無で加工品・自然木の二者に大別した。加工品の総数は182点にも達した。加工品はさらに製品(一定の目的で加工されたもの)・粗加工品（加工痕跡をわずかにとどめる不明木製品）の二者に大別できる。

(1)　加工品

農具　　鋤・田下駄・槌・槌の子・杵・エブリ

工具　　斧柄

馬具　　鞍

狩猟具　　弓

祭祀具　　形代（二叉状木製品・舟形木製品・刀子形木製品）

装身具　　櫛

履物　　下駄

器具　　火鑽臼・ヘラ状木製品・有孔板

用途不明品

(2)　粗加工品

土木建築材　板・角材・杭

割截材

枝・幹材

現在，木製遺物は整理作業をはじめたばかりであり，不明遺物も数多く，最終的な分類および詳細は調査報告書に譲る。

木製遺物の所属時期は，水路状遺構の下層中から同時に出土した土器からみて，ほぼ6世紀後半から7世紀前半に属するものとみられる。

以下，出土した木製品のうち代表的な遺物の特色を述べる。

農具　耕作具としては鋤が6点出土しているが，鍬の出土は確認されていない。鋤にはナスビ型鋤(第7図6)・平型鋤(7)・二叉鋤が認められる。全般的に身は厚く仕上げられるが，(6)のナスビ型鋤においては1cmと薄く，先端部付近では約0.3cmである。

この鋤は先端付近の形状からみて鉄製の鋤先が装着されたものとみられる。鋤はすべて板目材を使用している。編み具とみられる槌の子は11点出土している。槌の子(3)は樹幹を利用したものである。全長約 17～23 cm・直径約 3～6 cm の大きさのものが多い。杵は3点出土しており，いずれも竪杵である。いずれも直径約 8 cm 前後の樹幹を利用している。その他，田下駄・エブリ・槌が各々1点ずつ出土している。

馬具　馬具として鞍の一部(1)が出土している。形状からみて前輪と推察される。居木に接する部分近くより破損しているため，全様は不明な点が多い。精製品であり木地面は平滑に仕上げ，全面に黒漆が丁寧に塗布されている。後輪・居木等の出土は認められなかった。このほかに狩猟具として弓の弓筈部分が2点出土している。

祭祀具　形代として舟形木製品(8)2点・二叉状木製品(9)と刀子形木製品1点が出土している。このほかに樹枝等の加工品のうち数点は祭祀具と推察できる遺物も存在する。2点の舟形木製品はいずれも構造船を模しており，舳と艫の部分を入念な加工により写実的に表現している。上部には粗い造りではあるが方形の刳り込みが認められる。舟幅および高さは2点とも 5 cm×3～3. 5 cm と同規模であるが，全長は約 20 cm(8)と約 43 cm の2者に分れる。

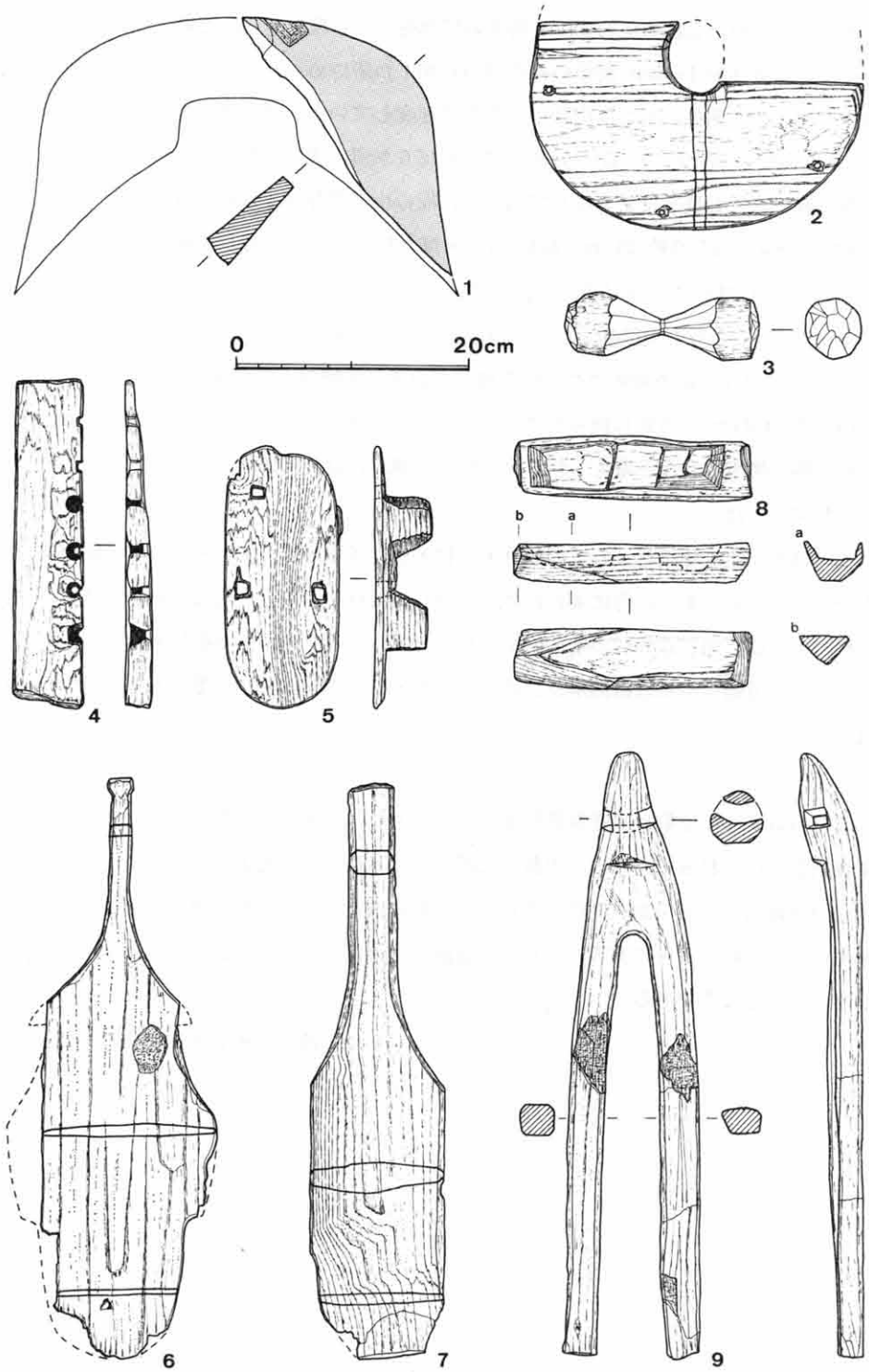
二叉状木製品(9)は全長約 52 cm で，二叉部分は長さ約 37 cm・一辺約 2 cm 前後の方柱状を呈している。基部は尖りぎみに上方へ緩やかなカーブを描きながら立ち上がる。基部の中央やや上部には横方向に開口する方形の孔が穿たれている。樹幹の二叉部分を利用して造られている。二叉となる方柱部は全体的にやや丸味を帯びているが，底面は直線的に水平な面をもっている。この木製品はその形状が修羅に似ていることから，修羅の形代かともみられるが，その用途は現在のところ不明である。

装身具　横櫛が1点出土している。部分的な出土であり全様は不明であるが，推定全長約 10 cm 程度とみられ，高さ約 4 cm で白木の板目材を使用したものとみられる。

履物　下駄が4点出土している。(5)は，全長約 22. 4 cm・幅約 9. 8 cm・高さ約 5 cm を測る。先端部近くの中央やや左寄りにやや小さな方形孔が1か所認められる。この孔は鼻緒孔とみられ，これによりこの下駄は右足用と判断される。厚味のある歯は外方向に八の字形に開く形で造り出され，下駄としては古い形を示している。他の3個の下駄もいずれも右足用であった。

器具　数多くの器具が出土しているが，現在その大部分は用途不明なものが多く，その機能が判明しないものが多い。出土遺物の多くは組み合せて使用されたとみられる加工が認められる板材や角材である。それらは穿孔やホゾ・切り込み等の加工がなされている。

有孔円板(2)は厚さ約 0. 8 cm の薄い板目材を使用している。破損品であるために全形



第7図 木 製 遺 物 実 測 図

1. 鞍 2. 有孔円板 3. 槌の子 4. 火鑽臼 5. 下駄 6・7. 鋤 8. 舟形木製品 9. 二叉状木製品

は不明であるが，元は直径約28cm前後の円形を呈する板であったと考えられる。板の中央付近には直径約4～6cm前後の楕円形の穴が1か所認められる。さらに板面の端部には直径約 0.6cm 前後の小さな円孔が3か所に存在している。この孔は板の端部から約1.5cm 程度内側に穿たれている。完全品であれば6か所に穿孔されていたものとみられる。板面は粗い木目を残したままにしているが，板の小口部分は丁寧に面取りを行っている。

火鑽臼（4）は長さ約28cm・幅約6cm・厚さ約1～2cm の板材を使用している。板の長側面の一方に抉り穴が6か所もうけられている。この6か所の抉り穴はほぼ 3.5cm の間隔をもつ。このうち火鑽臼として使用された穴は4か所であり，それらは直径約1.4cm・深さ約0.5～1.5cm の範囲でこげ痕を残している。火鑽臼として未使用の穴は，長さ約1cm・幅約0.6cm で方形に抉られている。こげ痕の範囲から，火鑽杵は直径約1.4cm前後の円棒が使用されたと考えられるが，今回の調査において火鑽杵とみる木製品の出土はみられなかった。

このほか，土木建築材としての板材・角材・杭が多数出土している。杭は流路の護岸にも一部使用されており，特に堰の部分に集中し，板材・石等とともに組み合わされていた。板材の中には，竪穴式住居の壁に使用されたとみられる厚味のある板材も出土している。さらに出土遺物の中には自然木及び種子（モモ・ドングリ・クルミ等）も多数含まれていた。

これら数多くの遺物は現在整理作業の途中であり，今後整理作業の進行とともに新たな調査結果が得られるであろう。木製品に関しては不明な点が数多い。古墳時代の木製鞍は現在当遺跡出土のものが4例目であり，佐賀県石木遺跡・大阪府堺市陵南遺跡・奈良県榛原町谷遺跡に続くものである。これらの遺跡出土の鞍もその詳細が不明なため今後の報告が待たれるところである。

（竹原一彦＝当センター調査課調査員）

北金岐遺跡C地点の調査

田代　弘

所在地　亀岡市大井町北金岐

調査期間　昭和59年11月5日～12月4日

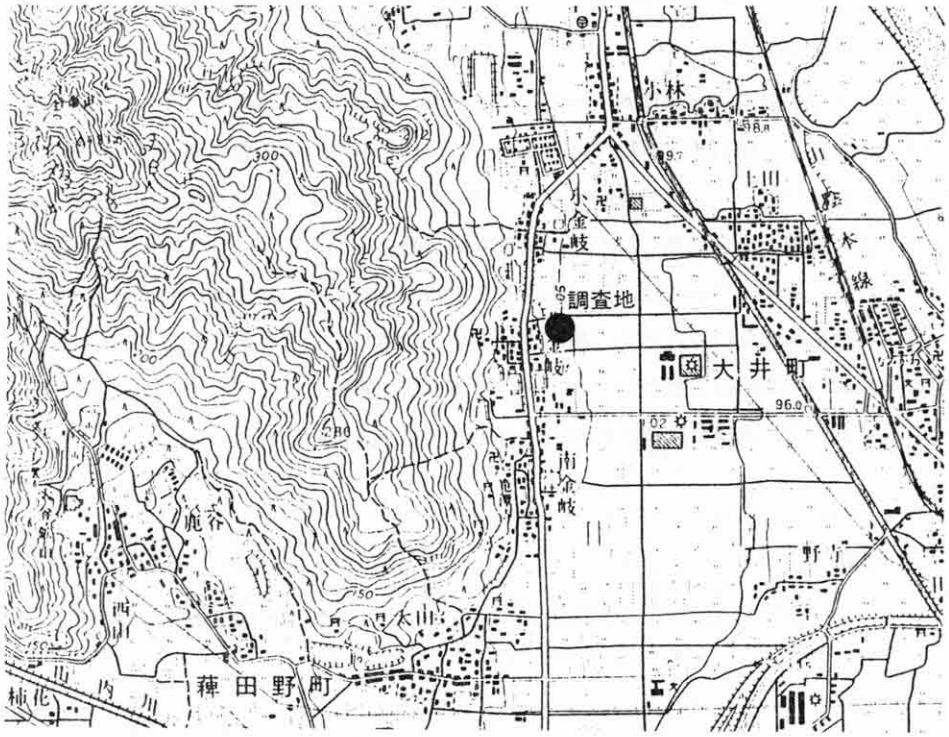
調査面積　約 350 m²

1. はじめに

当遺跡は標高 431 m を測る行者山からゆるやかにのびる丘陵端を占め，亀岡盆地を一望する好所に立地している。国道9号バイパス敷設工事に先立つ当調査研究センターによる桑田郡条里跡の調査によって新たに確認された遺跡の一つである。

今回の調査は，昭和57・58両年度にわたって実施された試掘および発掘調査成果に基づきC地点隣接地約 350 m² を対象として行った。

2. 調査経過



第1図　調査地位置図 (1/25,000)

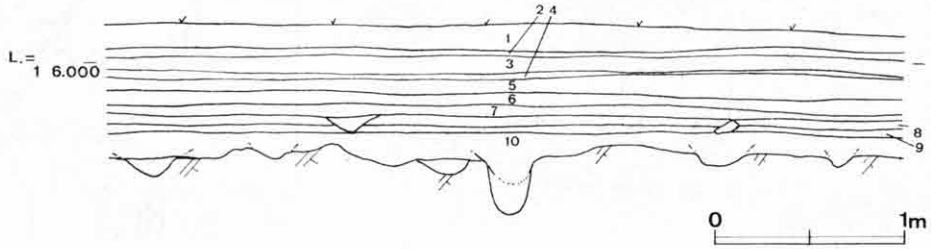
前年度までに東西70 m・南北480 mのうち約6,500 m² が調査され，縄文時代晩期～中世にわたる多量の遺物と，弥生時代・奈良時代・鎌倉時代以降の大きく三時期を中心とする多数の遺構が検出され，当該遺跡が長きにわたる複合集落遺跡であることが判明している。(注1) 今回の調査地点は，奈良時代・鎌倉時代の掘立柱建物跡を多数確認したC地点に隣接することから，同遺構群と一連の遺構の存在が予想されたため，上層での条里制関連遺構の検出とあわせ下層遺構の検出に主眼をおいた。

掘削にあたっては上層を重機（パワーショベル）を用い剝ぐこととし，包含層以下を人力によって掘削することとした。

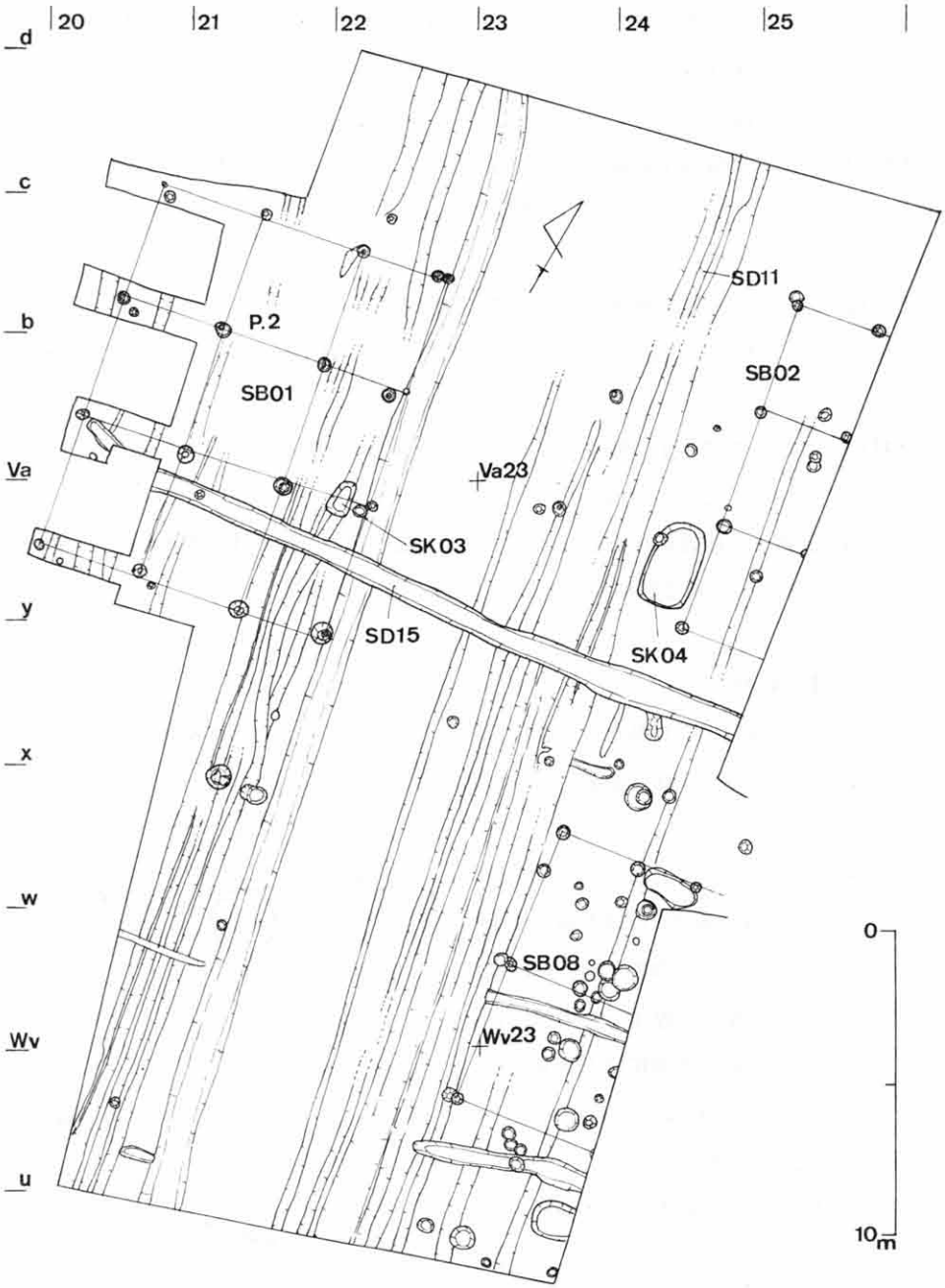
調査地は丘陵裾部の緩傾斜地にあたり，現状は水田である。耕地造作にあたって傾斜地基端側を削平し，末端側へ押し出しつつ水平面（耕作面）を確保するもので，棚田状を呈する。したがって，基端側ではわずか20 cmの掘削によって地山面が現われ，遺構が検出されたのに対して，末端部では約1 mの掘削を必要とし，多数の土層を観察することとなった。

精査の結果，遺構の多くを地山直上で検出し，部分的にその上層の漸移層（黒色粘質土中～下層）において確認することができた。検出した遺構は，上層において南北方向にほぼ平行して走る多数の溝とその下層において東西方向を基調とする溝・掘立柱建物跡・土坑・ピット等である。

上層遺構は下層遺構とほぼ同一面で検出したが，切り合い及び埋土によって後者と明瞭に区別された。上層の溝状遺構は暗茶褐色～暗灰褐色系のやや砂質の埋土をもち後者の粘性の強い真黒色の埋土とは対称的である。細片化した石器・土師器を含むほかは顕著な遺物を含まず時期の比定は難しいが，中世段階の遺物のみが出土すること等から帰属時期が示唆される。性格については，溝が集中して重複関係を有し一定方向へ向う点，集落関係の付属施設を伴わない点などから耕作地に関する遺構であると考えられる。いわゆる「中世素掘り溝」であろうと思われるが，その機能は溝が断続することなく各々が独立し連続するところから，水田の水路にかかわるものであろうと推測される。(注2)



第2図　土　層　断　面　図（東　壁）


20
21
22
23
24
25
d
c
b
Va
y
x
w
Wv
u
P.2
SB01
SD11
SB02
Va23
SK03
SD15
SK04
SB08
Wv23
0
10m

第3図 遺 構 平 面 図

3. 検出遺構

下層遺構のうち主なものには，SD 15・SB 01・SB02・SB 08・SK 03 などがある。

SD 15　奈良時代後半に属するもので，前年度調査C地点において検出されたSD 04 に対応する。幅 0.8 m・深さ 0.5 m を測り，延長約 16.5 m にわたって検出された。唯一奈良時代に属する遺構である。

SB 01　3間×3間以上の掘立柱建物跡である。東一列の柱間が他より狭く庇状を示す。柱穴は径 25 cm 程度のものが多く，素掘りで花崗岩の柱石をもつものが多い。柱穴2より瓦器皿を検出した（第4図）。

SB 02　調査地北東端で検出した掘立柱建物跡で，2間×1間以上の南北棟である。ピットは SB 01 に比して小さく掘形も浅い。主軸をほぼ SB 01 に等しくする。瓦器・土師皿細片の出土をみた。

SB 08　2間×1間以上の掘立柱建物跡。南北棟で，SB 02 とほぼ同規模を有するものである。主軸は上記2棟にほぼ等しい。

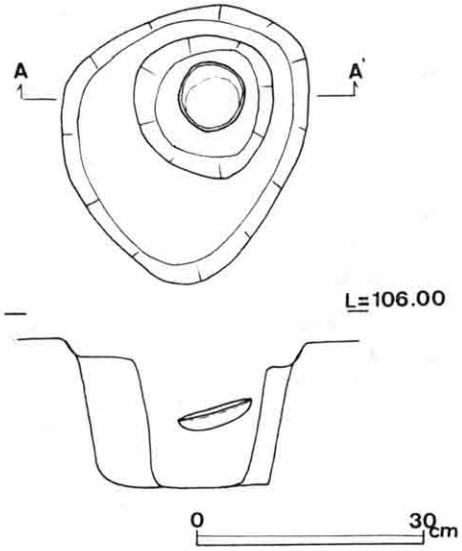
SK 03　瓦器・土師器細片を少量含む楕円形土坑である。長径 1.5 m・短径 0.8 m・深さ 0.1 m を測る。遺構を性格づけるような遺物の出土はみなかった。

4. 出土遺物

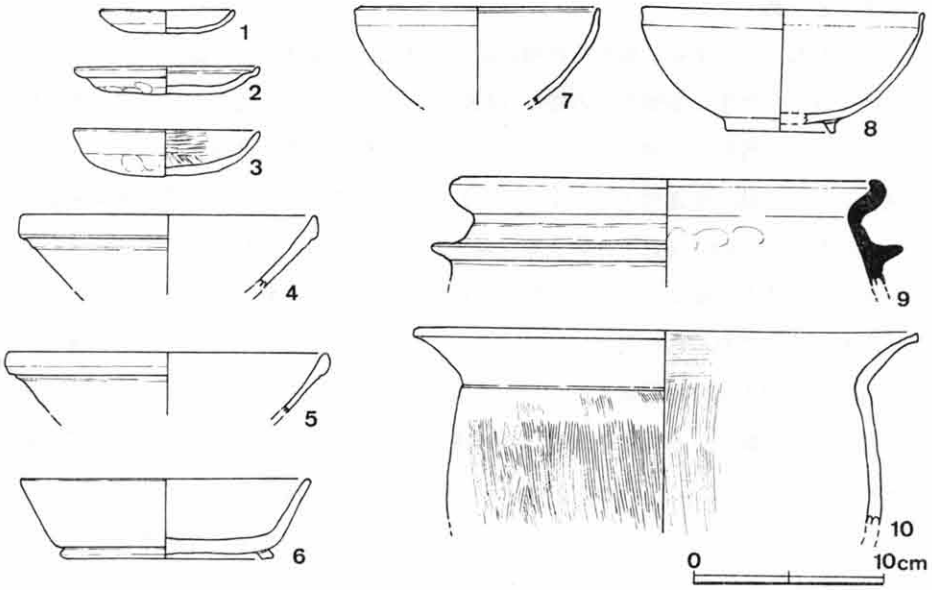
遺構に伴う遺物は，奈良時代および中世のもののみであり，包含層も大半が削平されているため遺物出土量は全体に少量である。第5図はそのうちの主なものを図示したものである。

（1）・（2）は土師皿である。（1）は口径 7 cm・器高 1.2 cm を測る。口縁を強く横ナデし，内面を丁寧にナデ調整する。（2）は端部が屈曲し，端部が肥厚するもので広い底部をもつ。外底面に指頭圧痕を顕著にとどめる。口径 9.8 cm・器高 2.4 cm を測り，胎土は乳白色を呈し精良である。

（3）は瓦器皿で口径 9.8 cm・器高 2.4 cm を測る。口縁を強く横方向にナデ，端部を調整する。外底面に指頭圧痕を顕著に残す。内面を丁寧にヘラ磨きし，鋸歯状の暗文を内底面に施す。



第4図　SB01 ピット内遺物出土状況



第5図 出 土 遺 物 実 測 図

1: SB02 2: SK04 3: SB01 P. 2 4: 包含層 5: SD13 6•10: SD15 7•8: P. 101 9: SD11

(4)・(5)は白磁椀の口縁部片である。玉縁状口縁を呈し，口縁外面を直線状に作るもの(4)と曲線状となるもの(5)とがある。体部下半は削りにより整形され，やや褐色がかった長石釉を掛ける。

(6)は須恵器杯身で，口径 15.3 cm・器高 4.2 cm を測る。貼り付け高台を外底面にもつ。青灰色を呈し堅緻である。

(7)・(8)は瓦器椀である。口径に比して器高のある椀で，口縁外端面を強く横ナデする特徴をもつ。(7)は口径 12.8cm で，口縁内端に沈線を施す。(8)は，高台が断面三角形をなし頑丈に造り出す。口径 15.0 cm・器高 6.4 cm を測る。明瞭な沈線は施さない。両者とも内面に丁寧なヘラ磨きを施すようであるが，器面が荒れており細部については明らかでない。

(9)は土師器羽釜で，肉厚な受口状の口縁を呈し，肩部にわずかに斜上方に延びる羽をもつ。胎土に砂粒を多く含み，暗茶褐色系の個性ある色調を呈すいわゆる大和型の羽釜である。口径 22.8 cm を測る。

(10)は土師器甕である。口径 26.4 cm・残存高約 11 cm を測る。「く」の字状をなす大きな口縁部をもち，体部は長胴である。器体内外面に精細なハケ調整痕をとどめる。

5. ま と め

以上，遺構ならびに遺物の概要を簡単に記してきた。当遺跡の包含層出土遺物には，最も古いものとして弥生土器甕形土器底部片(後期か)，新しいものとしては近世の陶磁片があった。いずれも現耕作土層に含まれていたもので遺構には全く供伴しない。

遺構からみた遺跡の変遷は上述のように奈良時代には溝が設けられ，中世鎌倉期を前後する時期に掘立柱建物3棟以上が南北を主軸として建てられ，居住区として設定される。その後居住区は南北方向に走る溝を多数もつ耕地として否定され，その後，主に水田としての土地利用が行われ現代に至っている。このことから，当地点での条里地割は鎌倉期を前後する居住区の否定時期以後のものであることは明らかである。(注3) これは昨年度のC地点の調査結果とも一致し，水田は奈良時代の古条里の施行以降，時代が下るに従って段階的に丘陵部に波及・拡大し，居住区が押し上げられていく様を窺うことができる。

(田代　弘＝当センター調査課調査員)

注1　「北金岐遺跡」(京埋セ現地説明会資料 No. 83-05)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983. 12. 8

注2　千代川遺跡第4次調査において多数検出された素掘り溝は，断続的でそれぞれが自己完結する傾向にあり，水路とするよりは畑作に伴う畝状の遺構との関連で考えられている。当調査研究センター村尾政人調査員の御教示による。
「千代川遺跡第4次」(京埋セ中間報告資料 No. 83-15) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983. 10. 4

注3　第2図を参照されたい。東壁の土層断面図の一部をレイアウトしたものである。地山以上に堆積する土層は基本的に10層からなり，第9層以上は人為的な削平を受け，水平面が保たれ，順序よく現耕作土に至る。素掘り溝は9層以上より掘削され，下層遺構は大半が10層中より掘り込まれている。層相互の関係は水平で，境界に凹凸などの複雑な影響関係をもたない点が特徴となっている。土層は，1. 耕土，2. 灰色土，3. 灰褐色土，4. 暗茶褐色土，5. 明灰褐色土，6. 暗灰褐色土，7. 明褐色粘質土，8. 暗褐色粘質土，9. 黒褐色粘質土，10. 黒色粘質土と続く。地山は黄褐色の山土の再堆積土である。

最後に本小文作成にあたっては，事実関係において当調査研究センター森下　衛調査員より多くの御教示を得た。また，村山一弥・内藤正裕両君の協力を得た。文末ながら記し，感謝の意を表したい。

昭和59年度発掘調査略報

7. 田辺城跡第6次

所在地　舞鶴市大字南田辺小字大内口下83

調査期間　昭和59年10月11日～11月7日

調査面積　約 60 m²

はじめに　田辺城(別名舞鶴城)は，織田信長から丹後国を給された細川氏が天正年間に築城したものであり，明治になり取り壊されるまで約280年間，細川氏―京極氏―牧野氏の代々の居城として栄えた。田辺城の所在する舞鶴の地は，築城当初，北に舞鶴湾，南に沼沢地が広がっており，それらが自然の要害を形成するとともに，幾度かの城の修築・整備によって，田辺城は三重の堀をめぐらす城となった。

調査概要　今回の調査は，府立盲聾学校舞鶴分校の寄宿舎改築工事に先立って実施したものである。調査地は，当城郭の北東隅にあたり，復原図(舞鶴市教育委員会作成)によれば，三の丸堀跡に位置していた。

調査地の西を流れる用水路は，復原図やこれまでの調査成果から，三の丸堀の名残りと考えられたため，この用水路の東端からそれに直交するトレンチ(南北5m×東西12.5m)を設定し，堀跡に関わる遺構の検出に努めた。また他の部分については，工事の際に立会調査を行った。調査は，まず重機によって盛土・旧耕作土・床土を除去した後，人力によって掘削を行ったが，近代以降と思われる耕作に関わる溝以外特に顕著な遺構は検出できなかった。遺物は，漆器(椀)・木製品・銭貨(寛永通宝)・土師器・陶磁器等が少量出土した。

今回の調査では，当初期待された田辺城三の丸堀跡に関わる遺構は，検出できなかった。一部深掘りを行ったところ，あるいは立会調査による土層の堆積状態から，当地は沼沢地の様相を呈しており，このことは，田辺城の北東部における土地の利用状況を考える上で興味深いと言える。

(山下　正)

調査地位置図 (1/50,000)

8. 千代川遺跡第9次

所在地　亀岡市千代川町北ノ庄・桑寺・拝田

調査期間　昭和59年8月27日～12月12日

調査面積　約 1,800 m²

はじめに　今回の調査は，国道9号バイパス建設予定地が，千代川遺跡(特にその北半部を占める丹波国府推定地の西端部を中心とする地域)にあたっているため行ったものである。ただ，今年度は対象地が40,000 m² と広大なため，今後調査を数次に分けて行っていく上で，その計画を立てるための基礎資料を得る(遺構・遺物の埋没状況やその広がりを把握する)目的で行った試掘調査である。

調査地周辺では，昨年度に国府推定域内を東西に走る府道の拡幅工事に伴って調査を行った。その結果，弥生時代中期と奈良～平安時代の二時期を中心とする遺構・遺物を検出した。しかし，奈良～平安時代の遺構は，当地に比定されていた桑寺廃寺に関するものが大半と考えられ，国府と関連づけうるものはほとんど無かった。ただ，緑釉陶器や墨書土器などの奈良～平安時代の遺物の出土状況は，単に桑寺廃寺との関連のみではおさえきれない面もあり，当地を国府推定地とする可能性はやはり高いと考えられた。

調査概要　調査は，幅6mないしは3mのトレンチを16か所入れて行った。その結果，全体に当初の予想以上に旧地形の凹凸が激しく，後世の削平も著しいため，まとまった遺構を検出することはできなかった。しかし，弥生時代～平安時代の遺物包含層は，調査地の随所でみられた。また，その地形の凹凸から調査地を大まかに4地区に分けてとらえうると考えられた。中でも国府推定域は，中央部(No. 5•6トレンチ)の谷状地形部を境に南北に区切られた状態であった。

第1図　調査地位置図 (1/25,000)

その状況からみて，北部地区 (No. 7～11トレンチ)・南部地区 (No. 1～4トレンチ)ともに，国府に関する施設(建物群)の検出されることが予想されたが，それらを明確に把握することはできなかった。ただ遺物としては，墨書土器をはじめに多量に奈良

～平安時代のものがみられた。また，上記の谷状地形部でも，奈良～平安時代の土器や木製品が多く出土しており，今年度のトレンチでは検出しえなかったものの，周辺部に奈良～平安時代の遺構が存在していることを示唆しているものと考えられた。なお，これらの地区では，弥生時代後期～古墳時代後期の溝・土坑もいくつか検出しており，これらの時代の集落跡なども周辺に広がっていることが予想される。

また，拝田谷部(No. 12～14トレンチ)では，中世期の遺物包含層が比較的厚くみられたため，この時期の遺構面と考えられた包含層下面で精査を行った。しかし，遺構はほとんど確認できなかった。そこで，No. 14トレンチをその下層まで掘削したところ，古墳時代～平安時代頃の溝や土坑を検出した。

第2図 トレンチ配置図

まとめ 以上，調査の概略を示したが，残念ながら国府に関する遺構を明確につかむことはできなかった。しかし，奈良～平安時代の遺物は多量に出土しており，調査がごく限られた範囲であったこと，また後世の削平も各所で認められたことなどからみれば，今後の調査で部分的にせよ，当地を国府跡と実証できるような遺構を検出しうる可能性は高い。

さらに調査地の各地区で，弥生時代～古墳時代の遺構・遺物も検出している。このことから，それらの時代の集落の実態を解明することも重要な課題であろう。

(森下　衛)

9.　長岡京跡左京第115次（7ANMKK地区）

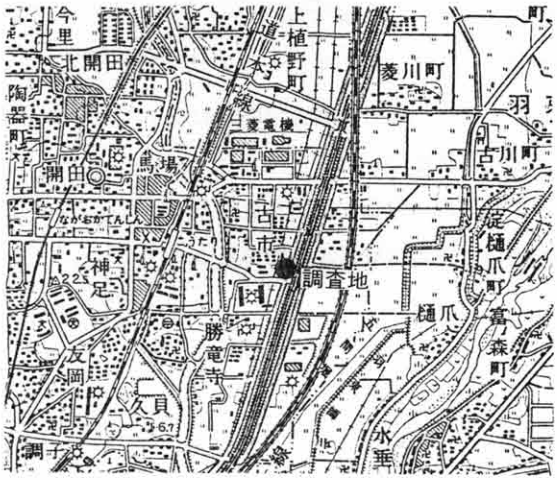
所 在 地　長岡京市神足字大張・雲宮・麦生ほか

調査期間　昭和59年9月21日～10月23日

調査面積　約 110 m²

はじめに　今回の発掘調査は，国道171号歩道設置工事に伴い実施したものである。調査地は，長岡京跡の推定左京五条二坊および六条二坊にかかる地域であるとともに，雲ノ宮遺跡(弥生時代)の範囲内でもある。調査対象地は，歩道設置という工事の性格上，道路に沿った細長いものであった。しかも，盛土崩落の防止，排水などの対策を講じなければならなかったため，検出された遺構は非常に断片的なものとなった。

調査概要　発掘調査は，水田・畑地の隣接地についてのみ行い，4本のトレンチを設定した。掘削は，道路に関係した盛土および旧耕作土・床土を重機によって排除したのち，人力によって行った。全般的な層位は，盛土・旧耕作土・床土・褐色土・暗茶褐色土・黒灰色土・暗青灰色粘質土(一部砂質土)の順で，暗茶褐色土層は北から南へむかって次第に厚く堆積していた。調査の結果，暗青灰色土層の上面で，土坑状および溝状の落ち込みを数か所検出することができた。しかし，遺物を伴うものはわずかで，時代・性格など不明なものが多い。このようななかにあって，比較的多くの遺物を伴ったものに溝 SD 11505がある。この溝は，幅約3.4 m・深さ約50 cmを測る。埋土は上層が暗黒灰色土で，下層は砂と礫との互層であった。遺物には弥生土器・土師器・須恵器があり，ほとんどが混在した状態で下層の砂礫層から出土している。遺物の内容に時代差があることや出土状態からみて，これらの遺物は周囲から流れ込んだものと考えられる。今回の調査では，長岡京跡および雲ノ宮遺跡に関係する明確な遺構は検出できなかった。しかし，溝 SD 11505に流れ込んだ遺物のあり方は，付近に関連遺跡の存在することを示すものであろう。　（三好 博喜）



調査地位置図（1/50,000）

10. 木津川河床遺跡

所在地　八幡市八幡小字一丁畑ほか

調査期間　昭和59年6月1日～10月22日

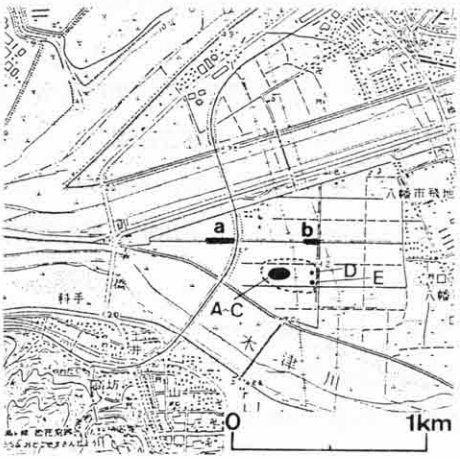
調査面積　約 700 m²（立会調査範囲は除く）

はじめに　木津川河床遺跡は，弥生時代後期から室町時代に至る集落跡として知られている。昭和58年度の調査では，古墳時代後期の集落の存在が竪穴式住居跡などの検出により明らかとなった。当地のような低湿地における遺跡のあり方を示すものとして，その意義は大きい。あわせて当地では，かつて山城盆地最下底部を中心に広がっていた巨椋池と大小さまざまな木津川旧流路による自然地理的影響を考える必要があり，研究課題も多いと言える。

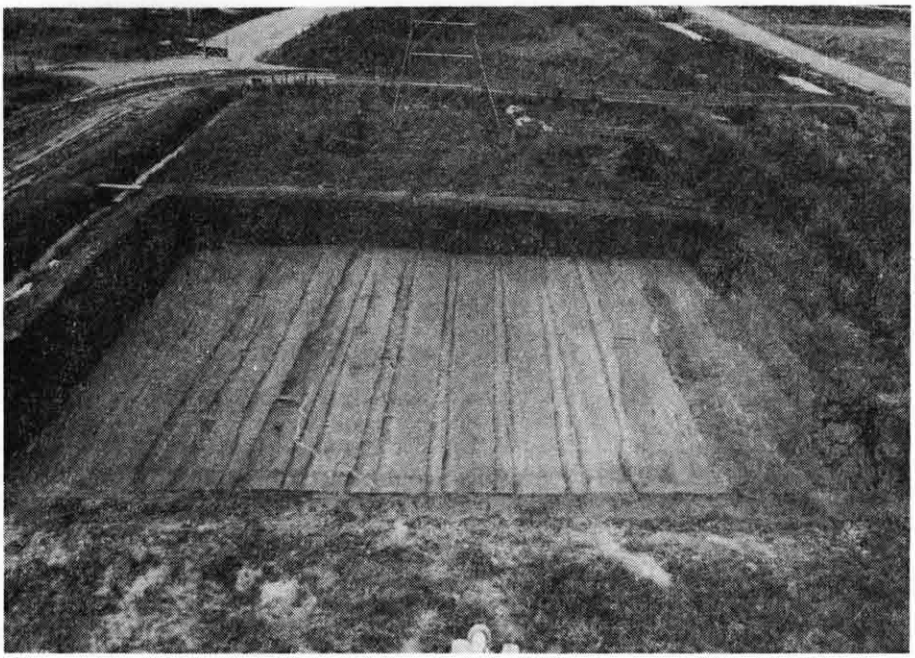
調査概要　昭和57年度調査地の北西に当るA～Cトレンチ，浄化センター建設予定敷地の最東端付近に位置するD・Eトレンチを発掘調査し，水路改修部分については立会調査を実施した(第1図)。発掘調査では，重機で表土・耕作土・床土を除去し，遺物包含層および遺構面の検出に努めた。

今回検出した主な遺構は，溝状遺構多数と掘立柱建物跡1棟である。南北方向に走る溝状遺構は，A～Cトレンチの地表下約1.6mで検出している(第2図)。最も広く掘削したCトレンチ(約 450 m²)でみると，長さ 16 m 以上，深さ約 10 cm 前後，そして幅はほとんどのものが約 25 cm という規模である。溝内には暗灰色粘土が詰っている。これらは畑地耕作の際に設けられた畝間の溝(凹み)と考えられる。遺物には，土師器皿，須恵器片，瓦質土器(香炉片・瓦器椀片)などが入っている。時期は室町時代から近世初頭にかけてのものである。

掘立柱建物跡は，上記の溝検出面からさらに 20 cm 前後下った面でとらえた。Cトレンチの南西隅に当る。南北3間・東西1間で，柱間規模は 1.1 m～2.1 m と一定していない。柱穴の形も不整形で，深さは平均 30 cm を測る。簡便な倉庫のような建物



第1図　調査地位置図（a・bは立会調査地）



第2図　Cトレンチ遺構検出状況（南から）

と言えよう。柱穴検出面の直上から土師器複合口縁壺片1点(古墳時代前期)が出土しているが，この建物の時期をこの期とするには問題が多い。

D・Eトレンチについては，遺構を検出していない。埋った池沼を思わせる暗灰色粘土を主体とする層が，地表下2m以上の深さまで認められる。陶磁器片や江戸時代の軒平瓦片など，若干の遺物をとり上げている。

立会調査ではA～Cトレンチとほぼ同様の層序を確認している。したがって，中・近世以前の遺構面がこのあたりまで広がって存在している可能性は高いと言える。遺構・遺物は検出していない。

ま と め　今回の調査で，古墳時代？と鎌倉時代から江戸時代に至るある時期，この地が乾陸化していたことの証左を得た。また中世の遺物は，青磁椀片(龍泉窯系・同安窯系)，滑石製鍋片をはじめとして，多種多様である。当地での中世集落のあり方と共に，各地との交流・通商に果たした木津川水運の重要性を，こうした遺物から十分窺い知ることができよう。

最後に今回は検出されなかったが，古墳時代集落についてもその広がりを明らかにしていく必要がある。今後とも相当の規模と豊富な内容をもつ複合遺跡として本遺跡を捉え，調査には慎重に対処していく必要がある。　（黒坪　一樹）

11. 隼上り3号墳

所在地　宇治市菟道東隼上り31

調査期間　昭和59年6月18日～9月22日

調査面積　約 1,800 m²

はじめに　当調査は，京滋バイパス建設工事に伴う事前調査である。

今回，検出した古墳は，今までその存在が知られておらず，遺跡名は既知の隼上り1・2号墳に隣接することから隼上り3号墳と命名した。

調査概要　墳丘は，直径12 m の円墳である。石室は，玄室長3.1 m・玄室幅1.4 m，羨道長1.55 m・羨道幅0.96 m，全長4.65 m の規模を有する片袖式の横穴式石室である。床面には，0.4 m×0.45 m 前後の平坦面をもつ石が2列に7個並んでおり，棺台として使用されたものと考えられる。また，羨道部入口には閉塞石が3個残存していた。出土遺物には，須恵器(杯蓋4点・杯身3点・高杯2点・壺1点・甕1点)，金環4点，鉄釘1点等がある。また，平安時代の須恵器の壺や黒色土器等も出土しており，壺は蔵骨器として使用された可能性がある。平安時代まで石室は築造時の姿を残し，再利用されていたと考えられる。本古墳は，須恵器から6世紀末に築造され，少なくとも1回の追葬があったとみて良い。その他，トレンチ内から縄文時代早期の押型文土器が出土している。文様は，山形文と楕円文から構成されるものである。南山城では初出の資料であり，今後，当地の歴史を考える上で非常に重要である。今回，検出した3号墳は，既知の1・2号墳に比べ約1/2の規模しかない。このことから1・2号墳に代表される一群と，3号墳に代表される一群が丘陵上に広がっていた可能性がある。両者は隣接しているにも係わらず，石室構造が異なることなど，被葬者の性格の一端を表わしている。今後，周囲の遺跡との関連が重要なポイントとなろう。なお，3号墳は，宇治市教育委員会が主体となり，日本道路公団の協力で移築保存されることとなった。　(小池　寛)

調査地位置図(1/50,000)

12. 燈 籠 寺 遺 跡

所 在 地　相楽郡木津町内田山

調査期間　昭和59年８月１日～10月30日

調査面積　約 580 m²

はじめに　燈籠寺遺跡の位置する内田山丘陵は，以前から弥生土器（畿内第Ⅰ～Ⅴ様式）や埴輪片が散布することが知られており，昭和56年度の府立木津高等学校校舎増改築工事に伴う事前調査の結果，古墳の周濠状遺構が検出され「内田山古墳」として報告された。今回の調査も，木津高校の校舎増改築工事に伴う事前調査として行ったものである。

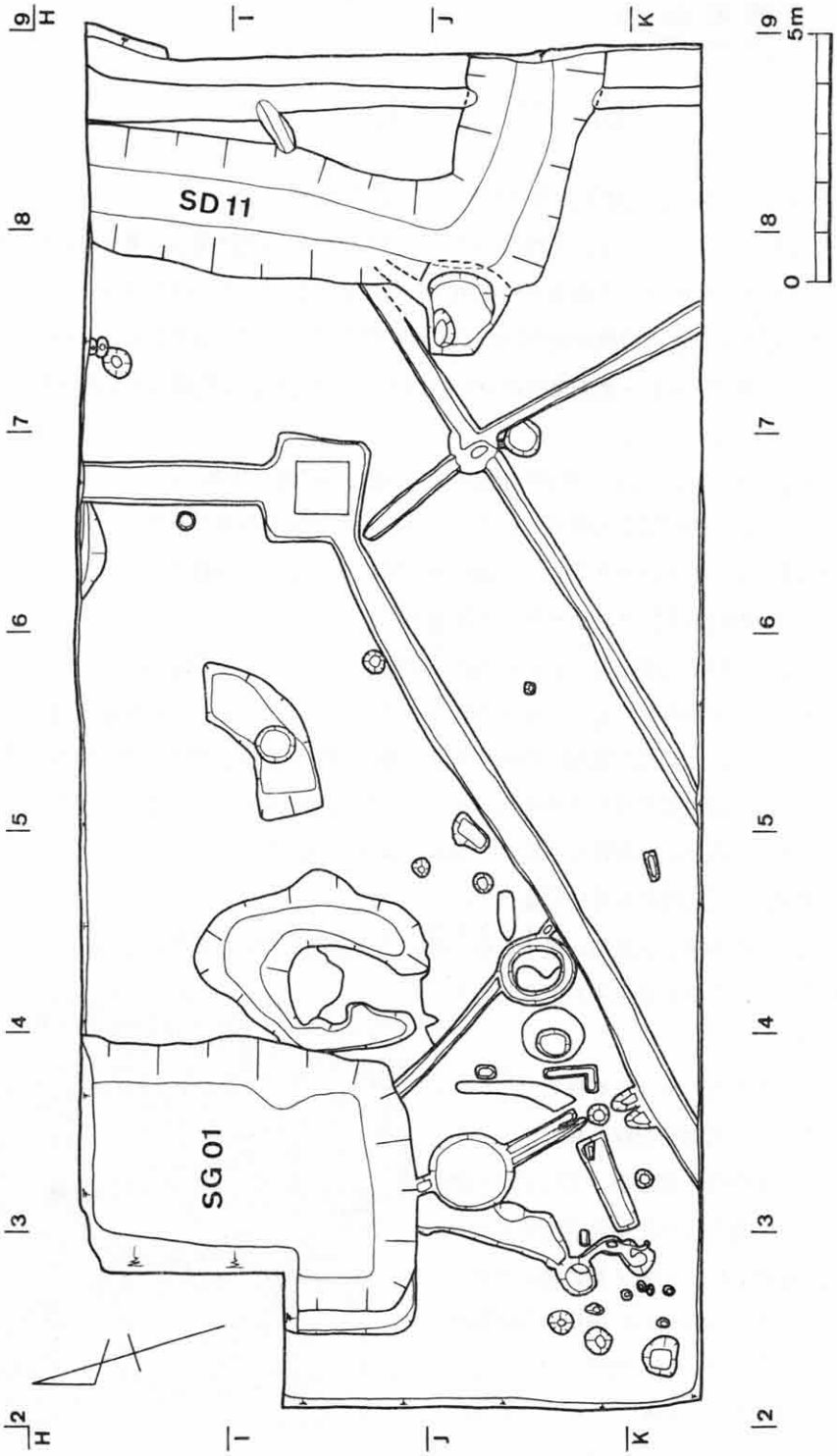
第１図　調査地位置図（1/50,000）

調査概要　校舎建築予定地（320 m²）全面を掘り下げたところ，古墳時代の溝状遺構（SD11）と近世の池状遺構（SG01）を検出した。

SD11は，Ｌ字状に屈曲する幅約2.8ｍ・深さ約0.5ｍの溝である。埋土は大まかに２層に分かれるが，溝北半では上層下面に須恵器（杯蓋・杯・皿・壺・甕），土師器（杯・甕）及び土馬が散乱していた。また，埋土下層からは多量の埴輪片が出土した。溝北半では円筒埴輪片が主体を成し，溝南半では家形埴輪片がまとまって出土した。家形埴輪は，胎土製作技法からみて２個体以上あるようだが，復元できるものは入母屋造りの１個体のみである。

ま と め　Ｌ字状の溝SD11は，56年度調査の内田山古墳と同様の方墳の周濠と考えられる。そこで56年度のものを「内田山２号墳」，今回のものを「内田山３号墳」と命名した。このように内田山丘陵には古墳群が形成されていたことが確認されたが，３号墳の時期に関しては，埴輪の型式から古墳時代中期前葉頃と思われる。

なお，溝SD11上層の土器は，いずれも８世紀後半のものである。須恵器の壺や甕が口頸部を失っていることや，土馬が混っていることなどから，祭祀行為の後で，半ば埋った古墳周濠に投棄されたのであろう。　（戸原 和人）



第2図 遺構平面図

府下遺跡紹介

24. 御　　土　　居

御土居は，豊臣秀吉が京都を修理・復興するにあたって，京都を「洛中」「洛外」にわける目的で造営したものである。東は鴨川の西岸に沿い，北は上賀茂から鷹ケ峰，西は紙屋川沿いに北野・壬生を通って東寺の南を通るように造られている。御土居は，土塁であり，聚楽第を中心とする秀吉政権の根拠地たる京都を防衛する目的で造られたといわれている。最近，このような軍事的・治安維持的目的のほかに，水害を防ぐ堤防の役割を重視する見方もでてきている。

御土居の築造については，『近衛信伊公記』天正19（1591）年条に，

一，天正十九壬正月より洛外ニ堀ヲホラセラル，竹ヲウヘラルルヿモ一時也，二月ニ過半成就也，十ノ口アリト也，此事何タル興行ソト云々，悪徒出世之時ハヤ鐘ヲツカセソレヲ相圖ニ十門ヲタテテ其内ヲ被捲為ト也

とあり，この史料には見えないが，堀を掘ってその土を用い土塁を造築したらしく，その上に竹を植えて十門を備えたことが知られる。このような工事は，天正19年正月頃から始まったとあるが，これは天正14（1586）年の聚楽第の造営に続いておこされた大事業である。しかも，天正19年正月に工事をはじめて，二月には半分以上の工事が終了していたとは驚くべきはやさといわねばならない。実際，築造工事は非常にはやかったらしく，『西洞院時慶卿記』天正19年5月18日条には，

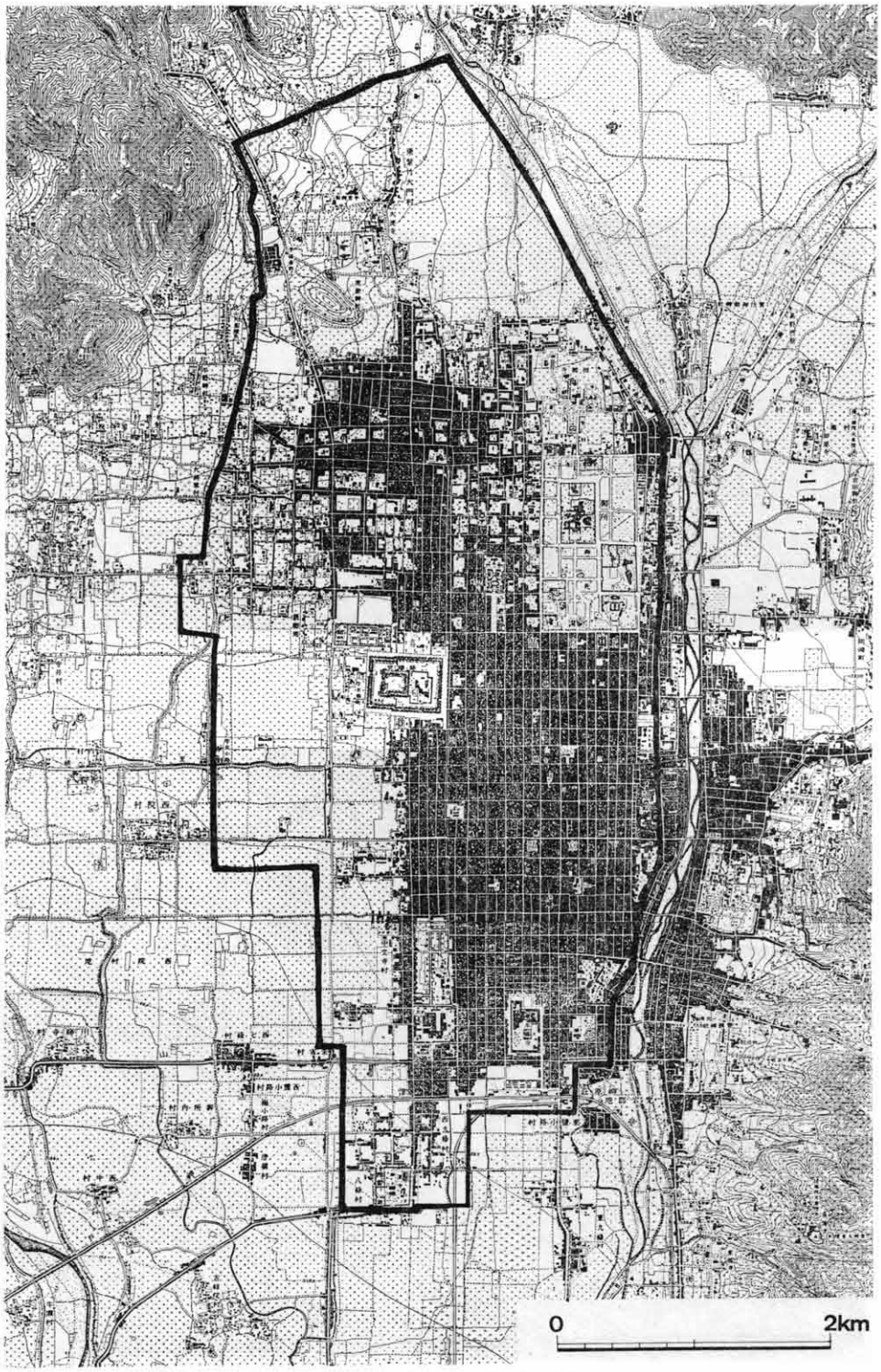
十八日，聖廟千度ニ詣候，殿下堤御一見の為社頭御入候間，其脇の家へ入て居候，人数十八人，千満主従宗永左近丞紫竹人足三人なり。

とあって，秀吉自ら御土居を巡覧している。

江戸中期の『京都舊記録』には，

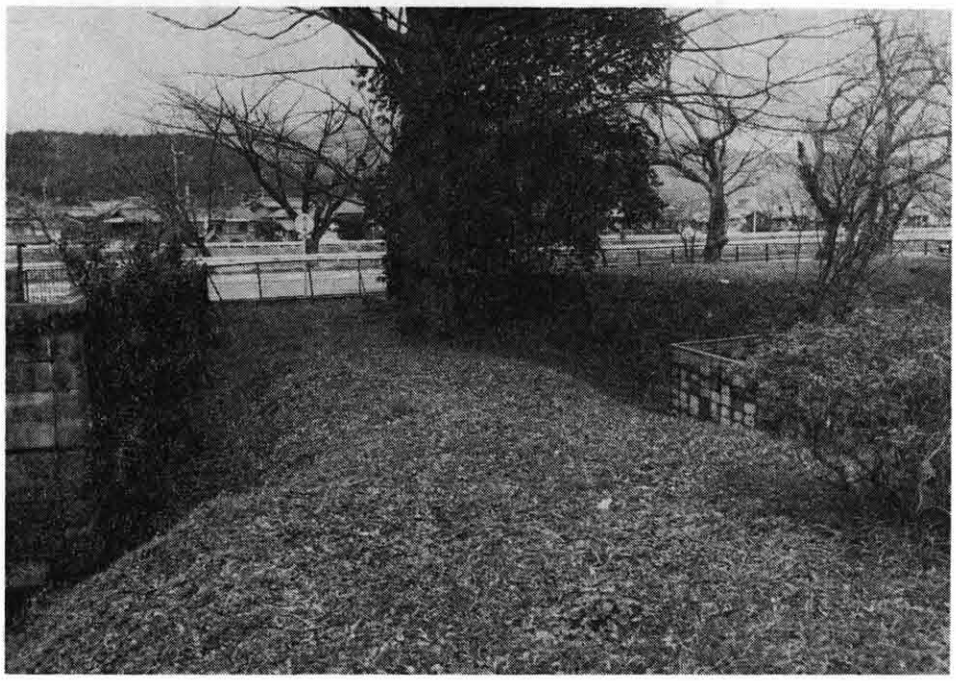
一，洛中四邊土居之事，文禄元年高麗陣之時，秀吉公ハ肥前之名護屋之城ニ御在陣被為成，高麗ノ都の構，本唐之様子などを被為聞召，細川玄旨法印等に御相談有之，其後京都之四邊ニ御土居を築キ是ニ竹を植江，七口ヲ開キ，是ヲ総土居ト言，鴨川の西北より堤を

第1図　写真撮影位置図（1/50,000）



第２図　御土居復原図（原図には1/20,000京阪地方仮製地形図を用いた。）

第3図　御　土　居　現　状 (1)



第4図　御　土　居　現　状 (2)

築き皇都の構となる。

とある。この記事によれば，御土居は文禄の役後に造営されはじめたようになっているが，先に述べた安土・桃山時代の記録による限り，天正19年正月に起工され，同年5月にはほとんど完成したことは確実である。従って，この記事は誤りといえるが，ただ，江戸時代中頃の見解として，御土居を朝鮮・中国様式の都城の構を移したものとするのはおもしろい考え方である。江戸中期には御土居で囲まれた京都の町が，朝鮮や中国の都城とその形状が似ていたと意識されていた証拠になろう。

ところで，御土居には古絵図がいくつかあるが，京都大学所蔵のものは全7巻あり，最もすぐれている。第一巻のはじめには，御土居の総間数および絵図の比例等を記しており，最後に「元禄十五壬午年十一月」の年記がある。すべての絵図がこの時点で完成したかどうかわからないが，少なくとも江戸時代中頃に御土居を調べた事実のあったことはわかる。しかも，極めて精密に描写されているだけでなく，御土居の全形，それぞれの部分における間尺，形状の差異や変化を記載している。記載上の特色として，御土居のみならず，濠池通路，付近の竹藪樹木，神社，寺院，家屋の状況まで記し，鮮明な彩色を施している点があげられる。このことは，これら絵図が実際に実見・測定して描かれたことを傍証するものといえよう。この絵図の記載によれば，御土居の構造は，すべての場所で同一規格をもったものではなく，西辺部と比較して東辺部は薄く造られている。あるいは，鴨川の存在が影響しているのかもしれない。御土居完成後の管理については不明な点が多いが，角倉氏の支配例を考えると，その付近の寺院や代官等が支配地内のものとして管理したと思われる。いずれにせよ，管理というよりは放逐に近い形態であったというのが本当のところかもしれない。

現在，御土居は国の史跡に指定されているが，全域にわたって残っているわけではない。御土居の破壊は，慶長頃から町の発展のために部分的に行われはじめている。すでに，大正の中頃に西田直二郎が実地調査した時点で，西辺部・北辺部・東辺部にところどころ残る程度で，南辺部に至ってはその痕跡がほとんどないという有様であった。西田の調査から今日まで70年近く経過し，京都の町も周辺にまで都市化が進んだ結果，御土居の痕跡は北辺・西辺・東辺の一部が残存するにすぎなくなっている。　（土橋　誠）

参考文献

西田直二郎『京都史蹟の研究』
魚澄惣五郎『京都史話』
西田直二郎「御土居」（『京都府史跡勝地調査会報告』第2冊　京都府）1920

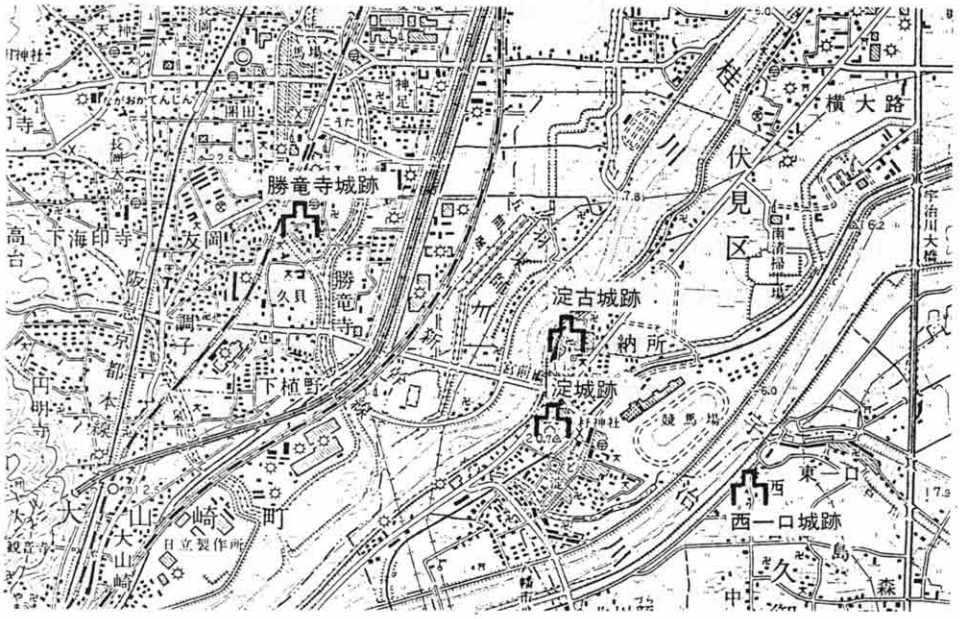
25. 淀　の　城　跡

淀は，京都の喉元ともいうべき地域である。古くから京都攻防の拠点として重視されてきた。淀の地域は，現在は消滅してしまったが，かつてはその東南に大規模な巨椋地をひかえ，また，桂川・宇治川・木津川・淀川の合流点付近に位置し，周囲を水で囲まれた天然の要害の地である。この地には，中世から江戸時代に至るまで，数回にわたって城郭が築かれてきた。一般に淀城といえば，江戸時代築城のものをさすので，それ以前の淀城を淀古城とよぶことにする。

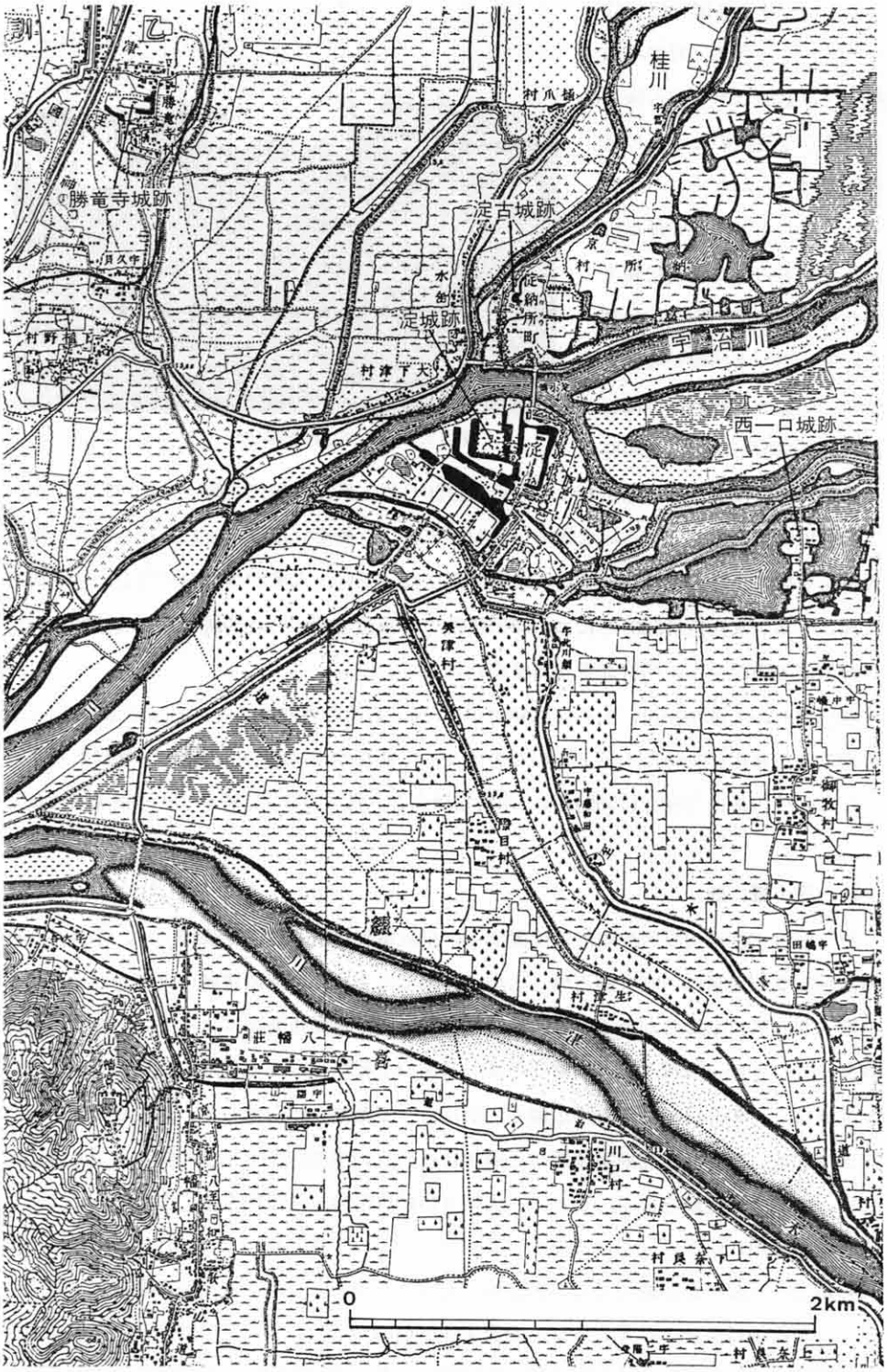
1. 淀古城跡

淀古城跡は，淀城跡より北側の京都市伏見区納所に位置する。明治23年に作製された京阪地方仮製地形図には堀跡とみられるものが記され，大正11年作製の京都市要図には堀の名残りのような水路や郭もしくは土塁状のものが記されている。現在では，城跡一帯はほとんど宅地化しており，城跡の遺構はほとんど残っていない。念仏寺・妙教寺がある台地や，その北側に残る水田，北城堀・南城堀という小字名に，その名残りをとどめるのみである。

応仁・文明の乱（1467～77）以後，室町幕府の将軍権力は弱体化し，各地で戦乱があい

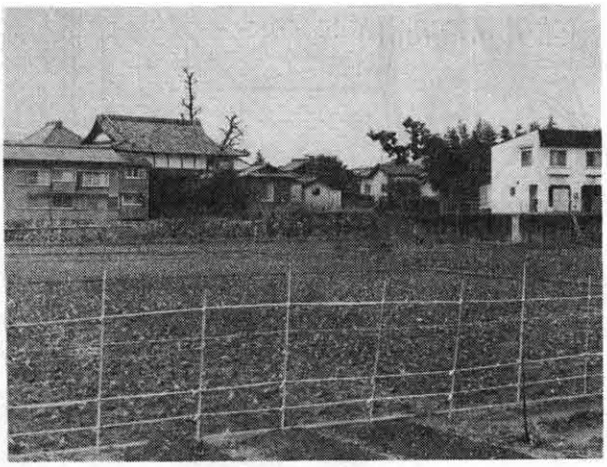


第1図　城　跡　位　置　図（1/50,000）



第2図　城跡と周辺の地形図（京阪地方仮製地形図に加筆・縮小）

つぎ，いわゆる戦国時代にはいっていく。京都に対する水陸交通の要衝である淀古城も，そのような時代のながれに無関係ではいられなくなる。文明10(1478)年には，守護畠山政長が西軍の畠山義就に備えるため，山城国乙訓・紀伊郡代神保与三左衛門尉を入部させる。明応2(1493)年以降は，山城国を掌握した細川氏の守護代級の被官によって守衛される。永正元(1504)年，摂津守護代薬師寺元長が当城に拠って，細川政元に叛している。永禄2(1559)年には，近畿をほぼ統一した三好長慶が，細川氏綱を当城に入部させる。その後，永禄9年には，三好三人衆が当城を奪取し，金子氏を入部させる。永禄11(1568)年には，織田信長方の軍勢に攻められ落城する。天正10(1582)年の本能寺の変後に，明智光秀が当城を修理している。



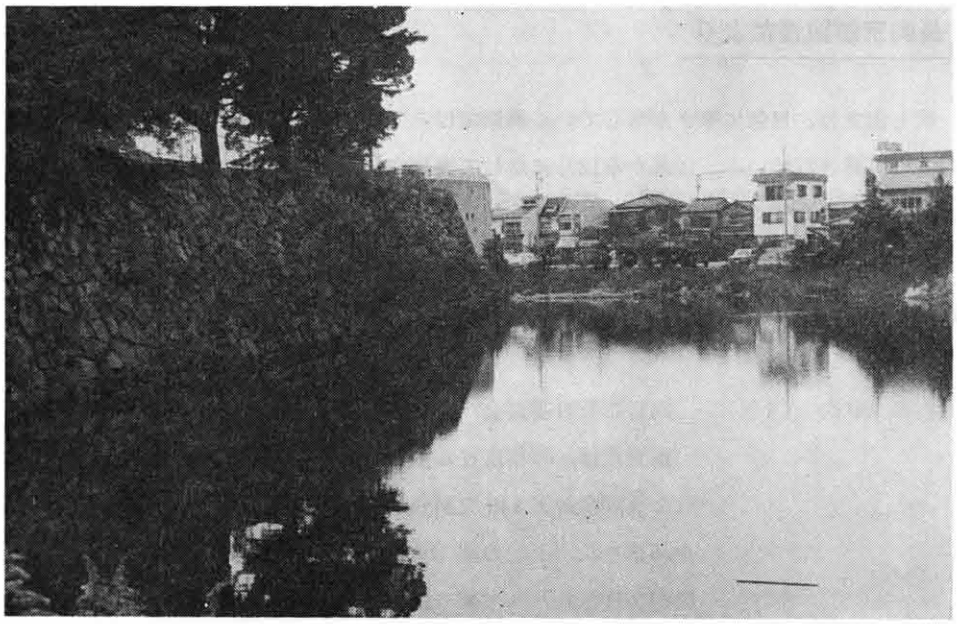
第3図　淀古城跡堀跡推定地（北東から）

豊臣秀吉の天下統一後，天正17(1589)年に，秀吉の弟の秀長によって当城が修築され，秀吉の側室浅井氏(茶々)が入る。このことによって彼女が「淀君」・「淀殿」と呼ばれるようになる。その後，文禄元(1592)年に，木村常陸介が入部するが，文禄4(1595)年廃城となる。

2. 淀　城　跡

淀城跡は京都市伏見区淀本町に位置する。京阪電鉄淀駅北西側に隣接して，本丸跡が残る。現存する遺構は，本丸跡石垣と内堀の一部である。本丸の南東隅に天守台があり，南西隅・北西隅にも櫓台がある。京阪地方仮製地形図や京都市要図によると，中堀や外堀も残存しているが，現状では，内堀以外は，人家や工場などが立ちならんでいる。

淀城は，元和9(1623)年松平定綱の入部によって築城がはじめられ，寛永2(1625)年にはほぼ完成している。淀城築城開始と同年に徳川氏の京都守衛および西国における拠点であった伏見城が廃城となる。これは，大坂夏の陣(1615)で豊臣氏が滅亡したことにより，大坂城が徳川氏の西国における拠点となったことと，京都守衛のためには，古くからの要衝の地である淀の方が適切であったためであろう。このように，伏見城の機能の一端を受けついで淀城は築城される。また，慶安年間頃(1648～51)には，淀の対岸における中世以来の要衝であった勝竜寺城が廃され，淀城は，京都の喉元を扼する唯一の拠点となる。



第4図　淀城跡本丸石垣と堀（北西から）

淀城は，京都における徳川幕府の拠点として，松平氏や譜代大名が次々と入部し，享保8(1723)年稲葉正知が入部して以後，幕末まで稲葉氏の居城となる。なお，淀城跡本丸石垣に使用された石材には，刻印の残るものが多くあり，天下譜請に近い状況であった築城当時をしのばせる。

第5図　淀城跡本丸石垣刻印

はじめにも述べたように，淀の地は古くから京都に対する要衝として，攻防の拠点となってきた。周囲を水に囲まれた天然の要害の地も，現在では治水工事や干拓によって，かつての水郷の面影はほとんど失われている。しかし，この淀の地が歴史上の要地であったことは忘れ去られてはならない。　（引原 茂治）

参考文献

魚澄惣五郎「淀城址」(『京都府史跡勝地調査会報告』第3冊　京都府）1922
『日本城郭大系』第11巻　新人物往来社　1980

長岡京跡調査だより

秋も深まり，日毎に寒さが増していく季節ではあるが，長岡京跡の調査は夏に引き続き数多く実施されている。10月から12月にかけて実施された発掘調査は，下表のとおり宮内2件，右京域8件，左京域6件の計16件を数える。

以下，10月24日・11月28日・12月19日に開催した長岡京連絡協議会のなかで報告された調査のうち，主だったものについて略記する。

宮内第150次　（1）　向日市教育委員会

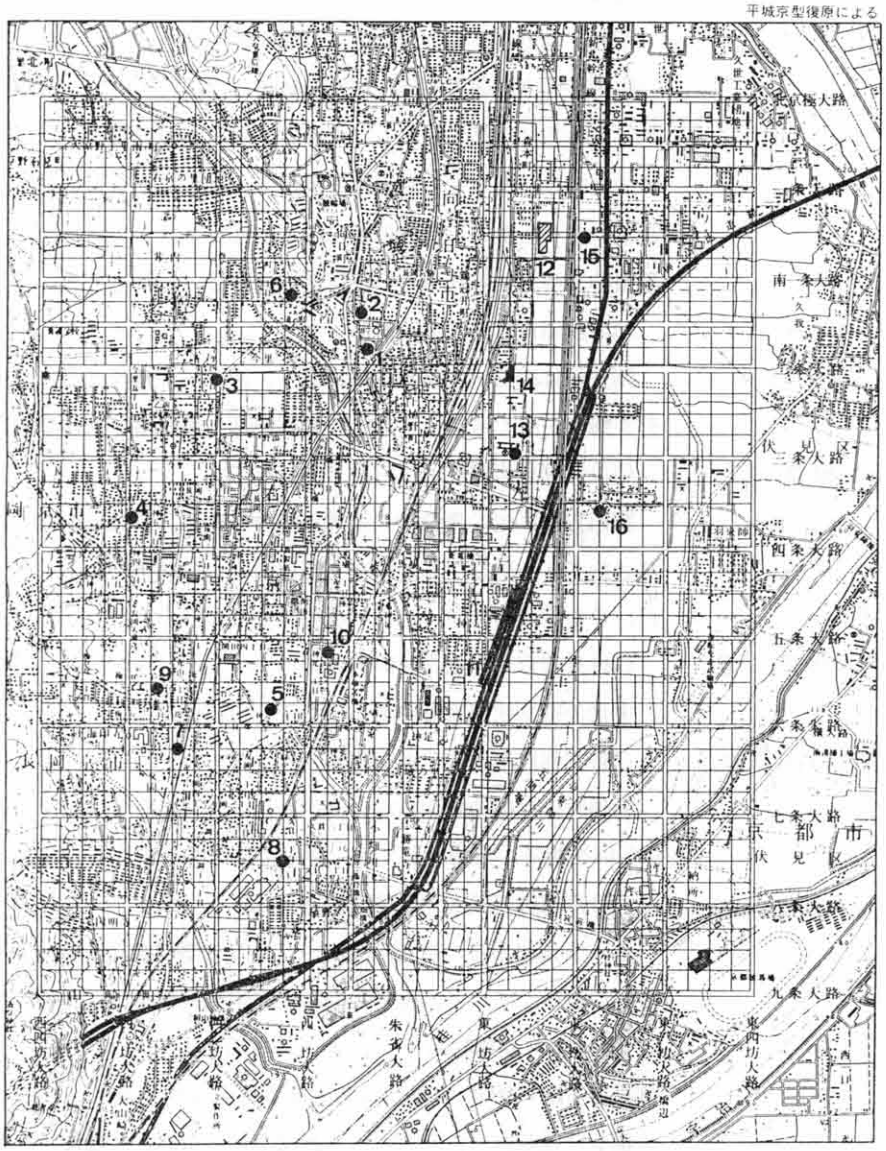
調査地は，昨年度瓦が多量に落ち込んだ東西方向の溝が検出された長岡宮跡第140次調査地の西接地で，5月に調査地の東半部が調査され，上記の溝（SD 14001）の延長が確認されたが，今回発掘調査された西半部では，幅約3～3.5mを測る上記の溝が，北肩がはり出して狭くなり，幅約1.5mを測る溝になることが判明

	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第150次	7AN15M	向日市上植野町御塔道7-12	向日市教委	59. 6. 1 ～ 7.12 10.15 ～10.29
2	宮内第151次	7AN15N	向日市上植野町山畑地内	〃	10.15 ～10.16
3	右京第171次	7ANITT-10	長岡京市今里4丁目	(財)京都府埋	7. 9 ～10.11
4	右京第178次	7ANIOK	長岡京市天神5丁目115	(財)長岡京市埋	9.25 ～ 9.29
5	右京第179次	7ANMSI-5	長岡京市開田4丁目423-1	〃	10.15 ～10.23
6	右京第180次	7ANGNM	長岡京市滝ノ町2丁目59-1	〃	11.19 ～12. 4
7	右京第181次	7ANNKC	長岡京市花山3丁目35	〃	11.22 ～12.22
8	右京第182次	7ANRHM	長岡京市久貝1丁目424-1	〃	11.26 ～12. 5
9	右京第183次	7ANKTM	長岡京市天神2丁目140-5	〃	11.27 ～12. 4
10	右京第184次	7ANMDB	長岡京市神足2丁目1-3	〃	12. 6 ～
11	左京第115次	7ANMKK	長岡京市神足上八ノ坪他	(財)京都府埋	9.21 ～10.25
12	左京第118次	7ANDKG-3 EJS-3	向日市森本町小柳22-30 鶏冠井町十相11-16	〃	10.18 ～
13	左京第119次	7ANFNT-4	向日市上植野町西大田	〃	10.11 ～11.30
14	左京第120次	7ANFZN-2	向日市上植野町地田	向日市教委	11.12 ～
15	左京第121次	7ANEJS-4	向日市鶏冠井町十相地内	〃	12. 7 ～12.20
16	左京第122次	7ANXNR	京都市伏見区羽束師菱川町	(財)京都市埋	12. 1 ～

長岡京跡調査地一覧表

長岡京条坊復原図

平城京型復原による



0 1000 2000m

数字は本文（　）内と対応

した。但し，狭くなった所から約0.5ｍで，後世の削平によって溝は消え，溝がさらに西へ続くかどうかは不明である。

右京第171次　（3）　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京跡の西二坊大路東側溝と帆立貝式古墳かと思われる古墳（仮称：今里庄ケ淵古墳）の前方部周濠を検出していたが，さらに弥生時代中期の竪穴式住居跡を検出した。住居跡は，円形のプランをもち，壁溝や柱穴も一部確認することができた。ただ規模については，トレンチ北東端で検出し，さらにトレンチ外へと延びていることから，7ｍ前後に及ぶと推定されるにとどまる。今里遺跡での弥生時代中期の住居跡の検出は，初例である。

右京第178次　（4）　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は西三坊大路推定地に当り，西三坊大路西側溝と推定される幅約1ｍ・深さ約0.2ｍの長岡京期の南北溝が検出された。

右京第181次　（7）　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

東西方向に走る鎌倉時代の溝が検出された。溝は幅約2.3ｍ・深さ約1ｍを測り，瓦器椀や土師器皿，青磁椀等が出土した。また，この溝の南には，地山の低い高まりがみられた。

右京第184次　(10)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中世の掘立柱建物跡や溝，土坑等を検出中である。

左京第115次　(11)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

古墳時代中期の東西方向の溝を検出した。幅約3.4ｍ・深さ約0.5ｍを測る。遺物としては，弥生土器等も出土している。

左京第118次　(12)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

南一条条間大路の南北両側溝や，長岡京期の掘立柱建物跡・井戸等を検出している。南一条条間大路南北両側溝は，北側溝であるSD 11805が幅約0.8～1.4ｍ・深さ約0.1～0.4ｍを測り，南側溝のSD 11806が幅約2.1ｍ・深さ約0.6ｍを測る。長岡京期の掘立柱建物跡は，現在，調査地東半部を中心に8棟検出している。ほかにも柱穴を多数検出しているので，建物数はさらに増えると予想される。井戸は素掘りで円形を呈し，径約1.6ｍ・深さ約1.2ｍを測る。井戸内からは，須恵器・土師器のほか，漆器・刀子・刀子柄・こて状鉄製品・墨書土器・種子等が出土した。ま

た，SD 11805 からは，「内膳」と記された墨書土器も出土している。

左京第 119 次　(13)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は三条大路の推定地で，三条大路北側溝と土器溜り・わだち等を検出した。三条大路北側溝は，幅約 1.6～2.3 m・深さ約 0.15 m を測り，溝内からは墨書土器・木簡・軒平瓦や，多量の須恵器・土師器・平瓦・丸瓦等が出土した。わだちは，砂礫で埋っていたが，その砂礫層を削って三条大路北側溝が造られている。

なお，木簡には「□□□□壹村□」と記されている。また，墨書土器には「廣」・「福」・「女」・「家□」等と記されたものがある。

左京第 120 次　(14)　向日市教育委員会

調査地は二条大路推定地に当り，現在，長岡京期の東西方向の溝が 4 本検出されている。いずれかが二条大路の南北両側溝になると思われる。しかし，最大距離間をとっても二条大路の道路幅である18丈(約 54 m)にはならない。

左京第 121 次　(15)　向日市教育委員会

調査地は南一条条間大路南側溝が検出された左京第89次調査地の北接地に当る。第89次調査では，南側溝の北肩は調査地外で確認することができなかったが，今回北肩が確認された。その結果，溝幅は約 2.4 m であることが判明した。

左京第 122 次　(16)　(財)京都市埋蔵文化財研究所

東三坊第一小路の東西両側溝が検出されたほか，長岡京期の面では，根石を詰めた柱穴がいくつか検出された。

(山口　博)

センターの動向（59. 10～12）

1.　できごと

10. 2　燈籠寺遺跡(相楽郡木津町＝木津高校）関係者説明会実施

10. 3　木津川河床遺跡（八幡市）関係者説明会実施

10. 5　石本遺跡（福知山市）関係者説明会実施

志高遺跡（舞鶴市）発掘調査開始

10. 11　京都府議会文教常任委員会視察

平安京跡(京都市右京区＝山城高校）発掘調査終了 7. 19～

田辺城跡(舞鶴市＝舞鶴盲ろう分校）発掘調査開始～11. 7

10. 12　長岡京跡左京第119次調査（向日市＝向陽高校）開始～11. 30

10. 18　長岡京跡左京第118次調査（向日市＝向日市体育館建設予定地）開始

10. 20　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡(奥谷西遺跡，多保市城跡）現地説明会開催 約40名参加

10. 22　薬王寺古墓（福知山市）発掘調査開始～10. 29

10. 23　長岡京跡左京第115次調査（向日市＝国道171号線改修）終了 9. 21～

10. 24　燈籠寺遺跡（相楽郡木津町）発掘調査終了 8. 1～

長岡京跡連絡協議会開催

10. 29　波江古墳（福知山市＝宮福鉄道）発掘調査開始

11. 5　北金岐遺跡(亀岡市＝国道９号バイパス）発掘調査開始～12. 4

11. 8　和田賀遺跡ほか(福知山市＝土師川改修）発掘調査開始

11. 19　長岡京跡左京第119次調査(向日市）関係者説明会実施

11. 28　長岡京跡連絡協議会開催

12. 4　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議―於当調査研究センター―出席（荒木事務局長，白塚総務課長，安田会計主任，堤調査課長，杉原課長補佐）

12. 6　第11回役員会及び理事会開催 ―於パレスサイドホテル―福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，岸　俊男，藤井学，川上　貢，中沢圭二，足利健亮，佐原　真，藤田价浩，武田　浩，東条寿各理事，荒木昭太郎常務理事，岡田忠司，草木慶治各監事出席

12. 1　釜ケ谷遺跡，赤ケ平遺跡(相楽郡木津町）発掘調査開始

12. 12　千代川遺跡第９次（亀岡市）発掘調査終了 8. 27～

12. 13　味方遺跡（綾部市）発掘調査開始

12. 19　長岡京跡連絡協議会開催

2.　普及啓発事業

10. 27　第25回研修会 ―近江の史跡を訪ねて―開催，「楓木原遺跡」「福王子古墳群」「南滋賀廃寺」「穴太廃寺」「服部遺跡」「守山市埋蔵文化財センター」「矢

橋復原住居」等を見学（講師）滋賀県教育委員会　葛野泰樹，参加者68名

10. 2〜11. 4　京都府立丹後郷土資料館主催特別展「丹後の弥生文化」に，太田遺跡，ケシケ谷遺跡，奥谷西遺跡の出土品35点を出品協力

10. 10〜11. 25　愛知県陶磁資料館主催特別展「近世城館跡出土の陶器」に，伏見城跡，園部城跡出土品35点を出品協力

10. 20〜11. 25　佐賀県立九州陶磁文化館主催「北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶器」展に，園部城跡出土品２点を出品協力

10. 28　中世城郭シンポジウム　一於大阪市一出席，発表 伊野近富「大内城跡」

11. 3〜60. 3. 31　向日市文化資料館主催の常設展示に，舞塚古墳出土人物埴輪１点を出品協力

11. 10　府教委監修のKBS番組「教育の窓」で，当調査研究センターの業務を紹介

11. 12〜11. 22　綾部市教育委員会主催「綾部の考古資料展」に青野遺跡，青野西遺跡出土品21点を出品協力

11. 18　福知山市天津公民館主催の展示会に石本遺跡出土品を出品し，あわせて，竹原一彦調査員「石本遺跡」の講演

11. 18　府政を知る会に，「埋蔵文化財の保護と当調査研究センターの業務」紹介

12. 2　第26回研修会開催　一於京都社会福祉会館一（発表者及題名）『淀川・琵琶湖の道』平方幸雄「京都市内」岩崎誠「乙訓地域」村尾政人「亀岡市内」宇治田和生「枚方市内」森田克行「高槻市内」谷口　徹「琵琶湖南部」森岡秀人「淀川下流部」（助言者）原口正三

12. 28　『京都府埋蔵文化財情報』第14号刊行

府下報告書等刊行状況一覧（59. 1～12）

発掘調査報告書関係

『埋蔵文化財発掘調査概報（1984）』京都府教育委員会　1984. 3

『恭仁宮跡発掘調査報告　瓦編』京都府教育委員会　1984. 3

『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984. 3

『平安京跡発掘調査概報』（昭和58年度）京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984. 3

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』（昭和58年度）　同上　1984. 3

『中臣遺跡発掘調査概報』（昭和58年度）　同上　1984. 3

『音戸山古墳群発掘調査概報』（昭和58年度）　同上　1984. 3

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』（昭和58年度）　同上　1984. 3

『向日市埋蔵文化財調査報告書』第11集　向日市教育委員会　1984. 3

『物集女車塚古墳』（向日市埋蔵文化財調査報告書　第12集）向日市教育委員会　1984. 3

『長岡京木簡一』（向日市埋蔵文化財調査報告書　第15集）向日市教育委員会　1984. 10

『長岡京市文化財調査報告書』第12冊　長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所　1984. 3

『長岡京市文化財調査報告書』第13冊　長岡京市教育委員会　1984. 3

『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第１集　（財）長岡京市埋蔵文化財センター　1984. 3

『長岡京市埋蔵文化財センター年報』（昭和58年度）　同上　1984. 8

『蛇塚古墳発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第５集）宇治市教育委員会　1984. 3

『大鳳寺跡第４次発掘調査概報』（同　第６集）宇治市教育委員会　1984. 3

『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第13集　城陽市教育委員会　1984. 3

『亀岡市文化財調査報告書』第13集　亀岡市教育委員会　1984. 3

『聖塚・菖蒲塚試掘調査概報』（綾部市文化財調査報告 第11集）綾部市教育委員会 1984. 3

『和久寺跡第２次発掘調査概報』（福知山市文化財調査報告書　第６集）福知山市教育委員会　1984. 3

『高迫城跡』（舞鶴市文化財調査報告　第５集）舞鶴市教育委員会　1984. 3

『志高遺跡』（同　第７集）舞鶴市教育委員会　1984. 3

『宮津市文化財調査報告』第８集　宮津市教育委員会　1984. 3

『岩滝町文化財調査報告』第６集　岩滝町教育委員会　1984. 3

『扇谷遺跡発掘調査報告書』（峰山町文化財調査報告　第10集）峰山町教育委員会 1984. 3

『小池古墳群』（大宮町文化財調査報告　第３集）大宮町教育委員会・(財)古代學協會平安博物館　1984. 3

『権現山古墳発掘調査概報』（久美浜町文化財調査報告　第９集）久美浜町教育委員会 1984. 3

『平安京左京四条三坊十三町』（平安京跡研究調査報告　第11輯）(財)古代學協會 1984. 3

『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町』（同 第12輯）　同上　1984. 3

『法住寺殿跡』（同第13輯）　同上　1984. 3

『平安京左京三条三坊十一町』（同 第14輯）　同上　1984. 3

『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会 1984. 10

『大本山相国寺境内の発掘調査』大本山相国寺承天閣美術館　1984. 3

『史跡松花堂およびその跡発掘調査概報』石清水八幡宮　1984. 3

『花園大学構内調査報告Ⅰ』花園大学考古学研究室　1984. 2

『穴太・犬飼古墳群分布及び実測調査報告書』龍谷大学考古学研究会　1984. 10

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

「千代川・桑寺遺跡」（京埋セ現地説明会資料　No. 84-01）1984. 1. 19

「隼上り遺跡」（同　No. 84-02）1984. 3. 24

「石本遺跡」（同　No. 84-03）1984. 8. 4

「隼上り遺跡」（同　No. 84-04）1984. 9. 22

「奥谷西遺跡・多保市城跡」（同　No. 84-05）1984. 10. 20

中間報告

「長岡京跡右京第153次」（京埋セ中間報告資料　No. 84-01）1984. 1. 25

「重要文化財　三宝院宝篋印塔基壇」（同　No. 84-02）1984. 2. 27

「ケシケ谷遺跡」（同　No. 84-03）1984. 4. 26

「長岡京跡右京第165次」（同　No. 84-04）1984. 6. 6

「長岡京跡右京第171次」（同　No. 84-05）1984. 9. 25

「燈籠寺遺跡第２次」（同　No. 84-06）1984. 10. 2

「木津川河床遺跡」（同　No. 84-07）1984. 10. 3

「石本遺跡」（同　No. 84-08）1984. 10. 5

「長岡京跡左京第119次」(同　No. 84-09) 1984. 11. 19

府下現地説明会資料

「昭和58年度恭仁宮跡発掘調査概要」京都府教育委員会　1984. 1. 21

「帯城古墳群発掘調査」京都府教育委員会　1984. 9. 19

「市立桂中学校北分校の建設に伴う発掘調査」(財)京都市埋蔵文化財研究所　1984. 3. 11

「蟹ケ坂瓦窯発掘調査」(財)京都市埋蔵文化財研究所　1984. 4. 22

「鳥羽離宮跡第97次調査」(財)京都市埋蔵文化財研究所　1984. 7. 1

「長岡京跡左京第106次 (7 ANFTB-3 地区)」向日市教育委員会　1984. 2. 19

「物集女車塚古墳」向日市教育委員会　1984. 9. 15

「勝龍寺城跡・長岡京跡右京第163次 (7 ANMKI 地区) 調査」(財)長岡京市埋蔵文化財センター　1984. 7. 22

「神足遺跡・神足古墳・長岡京跡右京第163次 (7 ANMKI 地区) 調査」同上　1984. 8. 26

「長岡京跡右京第159次 (7 ANSDD-2 地区)」大山崎町教育委員会　1984. 7. 8

「大鳳寺跡第4次発掘調査」宇治市教育委員会　1984. 2. 18

「大鳳寺跡第5次発掘調査」宇治市教育委員会　1984. 9. 15

「中世宇治の町」宇治市教育委員会　1984. 12. 22

「田辺遺跡」田辺町教育委員会　1984. 6. 24

「田辺遺跡・城跡」田辺町教育委員会　1984. 10. 14

「史跡高麗寺跡第1次範囲確認調査」山城町教育委員会　1984. 11. 17

「史跡丹波国分寺跡第三次発掘調査」亀岡市教育委員会　1984. 12. 8

「池の奥古墳群(Ⅱ)」福知山市教育委員会　1984. 4. 28

「福知山城跡」福知山市教育委員会　1984. 9. 1

「和久寺跡」福知山市教育委員会　1984. 11. 10

「志高遺跡Ⅲ」舞鶴市教育委員会　1984. 3. 23

「浜村城跡発掘調査概要」舞鶴市教育委員会　1984. 10. 23

「田辺城跡」舞鶴市教育委員会　1984. 12. 25

「宮津城跡第3次発掘調査」宮津市教育委員会　1984. 3. 25

「高浪古墳発掘調査」野田川町教育委員会　1984. 8. 25

「小虫古墳群発掘調査」加悦町教育委員会　1984. 8. 25

「国指定史跡蛭子山古墳発掘調査」加悦町教育委員会　1984. 11. 4

「扇谷遺跡発掘調査」峰山町教育委員会　1984. 8. 26

「北白川追分町遺跡の発掘調査」京都大学構内遺跡調査会・京都大学埋蔵文化財研究センター　1984. 3. 26

「京都大学医学部附属病院構内の遺跡」　同上　1984. 7. 27

「新島襄旧邸内新島会館地点の発掘調査」同志社大学校地学術調査委員会　1984. 10. 20

「奈具岡遺跡」平安博物館　1984. 6. 17

その他の雑誌・報告・論文等

『京都府埋蔵文化財情報』第11号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1984. 3

『京都府埋蔵文化財情報』第12号　同上　1984. 6

『京都府埋蔵文化財情報』第13号　同上　1984. 9

『京都府埋蔵文化財情報』第14号　同上　1984. 12

『考古展　第3回小さな展覧会』　同上　1984. 8

『篠窯跡群―発掘調査の記録から―』　同上　1984. 2

『京都の文化財』第2集　京都府教育委員会　1984. 3

「文化財保護 No. 2 守り育てようみんなの文化財」京都府教育委員会　1984. 12

『丹後郷土資料館報』第5号　京都府立丹後郷土資料館　1984. 3

『丹後の弥生文化』(特別展図録15) 京都府立丹後郷土資料館　1984. 10

「丹後郷土資料館だより」第11号　京都府立丹後郷土資料館　1984. 3

『山城郷土資料館報』第2号　京都府立山城郷土資料館　1984. 3

『祈りとくらし』(展示図録4) 京都府立山城郷土資料館　1984. 10

「山城郷土資料館だより」第2号　京都府立山城郷土資料館　1984. 3

『京都の文化財地図帳』(財)京都府文化財保護基金　1984. 3

『文化財報』No. 44～No. 47　(財)京都府文化財保護基金　1984. 2～11

「京都市文化財だより」創刊号・第2号　京都市文化観光局文化財保護課　1984. 6. 10

『増補改編鳥羽離宮跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1984. 11

『常設展示図録　長岡京の歴史文化』向日市文化資料館　1984. 11

『長岡京跡』乙訓文化財事務連絡協議会　1984. 11

『長岡京』第31号　長岡京跡発掘調査研究所　1984. 3

『活動の記録』長岡京跡発掘調査研究所　1984. 11

『長岡京』創刊号～第31号合冊　長岡京跡発掘調査研究所　1984. 12

『宇治の遺跡』宇治市教育委員会　1984. 3

『文愛』第1号　(財)宇治市文化財愛護協会　1984. 12

『京都考古』第31号～第35号　京都考古刊行会　1984. 1～9

『太邇波考古』第４号　両丹技師の会　1984. 2

『古道』第３巻　京都学園大学考古学研究会　1984. 1

『土車』第29号～第32号　(財)古代學協會　1984. 1～10

『八幡市誌』第三巻　八幡市　1984. 3

『木津町史』史料篇Ⅰ　木津町　1984. 12

『福知山市史』第三巻　福知山市　1984. 3

受贈図書一覧（59. 9～11）

秋田県埋蔵文化財センター	秋田県埋蔵文化財センター　年報２，東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ～Ⅹ，三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書，土井遺跡発掘調査報告書，石名館遺跡発掘調査報告書，払田柵跡一第49－２～３・53・54次発掘調査概要一，此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書，県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書，遺跡詳細分布調査報告書
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	群馬県埋蔵文化財調査事業団年報３，森遺跡・中Ⅰ遺跡・中Ⅱ遺跡，奥原古墳群，荒砥東原遺跡
富士見市遺跡調査会	松山遺跡第３地点・観音前遺跡第５地点・八ケ上遺跡第４地点・松ノ木遺跡第30地点・松ノ木遺跡第31地点発掘調査報告書 針ケ谷遺跡群
(財)千葉県文化財センター	八千代市権現後遺跡，常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ，富津市岩坂大台遺跡，成東町真行寺廃寺跡研究調査報告，研究連絡誌 第５号～第８号，千葉県文化財センター年報 No. 9，遺跡ガイドブック１～２，房総考古学ライブラリー１
(財)東京都埋蔵文化財センター	多摩ニュータウン遺跡一昭和57年度一，東京都埋蔵文化財センター年報３
神奈川県立埋蔵文化財センター	小田原城跡八幡山遺構群，神奈川県立埋蔵文化財センター年報３ 西管領屋敷やぐら群
石川県立埋蔵文化財センター	金沢市近岡遺跡，松任市宮永遺跡，松任市横江Ａ遺跡発掘調査報告書，永町ガマノマガリ遺跡，石川県立埋蔵文化財センター年報 第４号
山梨県埋蔵文化財センター	研究紀要１，久保屋敷跡発掘調査報告書，豆塚遺跡，東新居遺跡
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	八ツ島遺跡，笛吹段・兎沢古墳群，茶木畑遺跡，原川遺跡
三重県斎宮跡調査事務所	史跡 斎宮跡発掘調査概報
(財)滋賀県文化財保護協会	滋賀県文化財目録　昭和59年度追録，ほ場整備関係遺跡発掘調査報

	告XI-2，北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書IX，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X-4，県道山賀一守山甲線単発工事に伴う遺跡発掘調査報告書，県道六条一野洲線工事に伴う関連遺跡発掘調査報告書I，国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II
(財)大阪文化財センター	第2回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料，片添遺跡第1次発掘調査報告書，友井東（その1），亀井遺跡II
(財)大阪市文化財協会	発掘された大阪
(財)八尾市文化財調査研究会	八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度，八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度，木の本遺跡，昭和58年度事業概要報告
(財)枚方市文化財研究調査会	枚方文化財年報V
奈良国立文化財研究所	条里制の諸問題III
埋蔵文化財天理教調査団	布留遺跡出土の製塩土器I
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒町遺跡一第31次発掘調査概要一，草戸千軒一調査研究ニュース一第11巻
山形県教育委員会	水木田遺跡発掘調査報告書，境田 C′・D 遺跡発掘調査報告書，俵田遺跡第2次発掘調査報告書，沼田遺跡発掘調査報告書，新青渡遺跡発掘調査報告書，千河原遺跡発掘調査報告書，願正壇遺跡発掘調査報告書，吹浦遺跡第1次緊急発掘調査報告書，作野遺跡発掘調査報告書，分布調査報告書(11)
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財保護行政年報
富士見市教育委員会	富士見市遺跡群II，難波田氏館跡発掘調査報告書(4)
千葉県教育委員会	房総のあけぼのI
川崎市教育委員会	川崎市文化財調査集録　第19集，県史跡西福寺古墳一保存整備報告書一，ふるさとかわさきめぐり，二子・溝口宿場の民俗
韮崎市教育委員会	坂井南遺跡
境川村教育委員会	柳原遺跡
静岡市教育委員会	駿河・伊庄谷横穴墳，泉ケ谷稲荷神社古墳群・丸子城泉ケ谷砦跡，佐渡山2号墳発掘調査報告書，昭和58年度静清バイパス(川谷地区)埋蔵文化財発掘調査概報
滋賀県教育委員会	県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書I，長命寺湖底遺跡調査概要，馬場遺跡発掘調査報告書，金ケ森西遺跡発掘調査報告書，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告X-1，同X-2，同XI-2，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X-4，井戸遺跡発掘調査報告書，県道六条一野洲線工事に伴う関連遺跡発掘調査報告書I，県道山賀一守山甲線単発工事に伴う遺跡発掘調査報告書，北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書IX，諸川遺跡発掘調査報告書，滋賀県中世城郭分布調査2（甲賀の城）
日野町教育委員会	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集
安土町教育委員会	西才行遺跡発掘調査報告書
今津町教育委員会	弘部野，今津町文化財調査報告書 第2集，同第3集

兵庫県教育委員会	龍子長山1号墳，明石城，丹波王地瓦窯，玉津田中遺跡調査概報Ⅰ，山垣遺跡，兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度
小野市教育委員会	毛無山3号墳発掘調査報告書，播磨広渡寺廃寺跡発掘調査報告書，高山古墳群調査報告書
加西市教育委員会	加西市開キ古墳発掘調査報告書
赤穂市教育委員会	史跡赤穂城跡本丸発掘調査報告書Ⅰ，周世入相遺跡発掘調査報告書
加東郡教育委員会	狐塚古墳，名草3号墳・4号墳，家原・堂ノ元遺跡
穴粟郡広域行政事務組合	皆木神田遺跡
大和郡山市教育委員会	平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書，額田部狐塚古墳周濠部発掘調査概要報告，追手東隅櫓・東多聞櫓発掘調査概要報告，大和郡山市西方寺所蔵一切経調査報告書
岡山県教育委員会	龍王塚古墳
下関市教育委員会	伊倉遺跡，綾羅木郷遺跡若宮古墳遺構確認調査概報，綾羅木川下流域の条里遺構
宗像市教育委員会	宗像埋蔵文化財発掘調査概報
行橋市教育委員会	竹並遺跡，福岡県行橋市近世宗教文化財調査報告書，椿市廃寺，下稗田遺跡調査概報Ⅰ～Ⅴ，隼人塚古墳，八雷古墳
鎮西町教育委員会	後田遺跡
八戸市博物館	特別展図録　土偶―縄文人の祈り―
岩手県立博物館	縄文の風景―大地と呪術
大船渡市立博物館	縄文時代の気仙
国立歴史民俗博物館	歴博 第6号，同第7号
市立市川考古博物館	昭和58年度市立市川考古博物館年報（年報 No. 12），下総国分尼寺跡Ⅱ 昭和58年度調査報告
大田区立郷土博物館	描かれた大田区図録
中野区立中野文化センター郷土史料室	（仮称）中野刑務所遺跡発掘調査概報
調布市郷土博物館	調布の古民家，開館10周年記念特別展 甲州街道
出光美術館	出光美術館 館報第47号，同第48号
富山市考古資料館	富山市考古資料館紀要 第3号
小松市立博物館	埋もれていた郷土の古代
福井県立若狭歴史民俗資料館	鳥浜貝塚 1983年度調査概報・研究の成果
山梨県立考古博物館	石橋条里制遺跡・蔵福遺跡・伊ノ下遺跡，縄文時代の酒造具―有孔鍔付土器展
愛知県陶磁資料館	特別展 近世城館跡出土の陶磁
愛知県清洲貝殻山貝塚資料館	朝日遺跡出土遺物にみる弥生時代のくらし
名古屋市博物館	名古屋市博物館年報 No. 7（昭和58年度）
滋賀県立近江風土記の丘資料館	近江の縄文時代
高島町歴史民俗資料館	高島町遺跡分布調査報告書，鴨稲荷山古墳周湟確認調査
水口町立歴史民俗資料館	住宅都市整備公団水口地区土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書
大阪市立博物館	大阪市立博物館報 No. 23

大阪城天守閣	特別展 大阪の古城と武将
兵庫県立歴史博物館	特別史跡 姫路城跡
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	藤原宮―半世紀にわたる調査と研究―
和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	特別展 岩橋千塚の時代
倉吉博物館	特別展 発掘された倉吉の歴史
島根県立八雲立つ風土記の丘	'84特別展 古代の装い
福岡市立歴史資料館	特別展図録「漢委奴国王」金印展
北九州市立考古博物館	須恵器のはじまり
佐賀県立九州陶磁文化館	佐賀県立九州陶磁文化館館蔵資料目録〈Ⅲ〉, 九州陶磁文化館年報 昭和58年度 No. 3
山鹿市立博物館	方保田東原遺跡，同(2)
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	研究紀要Ⅰ，宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報 1983年度
国學院大學文学部考古学研究室	森山塚，物見処遺跡1984
日本大学史学会	史叢 第33号
早稲田大学考古学会	古代 第77号
早稲田大学図書館	古代 第77号
名古屋大学文学部考古学研究室	折戸80号窯発掘調査報告書
広島大学文学部考古学研究室	帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅶ，旧寺古墳群測量報告
熊本大学文学部考古学研究室	サモト遺跡(1)
山武考古学研究所	稲荷峠遺跡，経塚遺跡，西ノ台遺跡，一宮城跡城之内遺跡，駒込遺跡，原遺跡，広ケ作遺跡，台の内古墳
玉川文化財研究所	大入遺跡発掘調査報告書
鎌倉考古学研究所	神奈川県鎌倉市小町1丁目309番地5地点発掘調査報告
考古学フォーラム	考古学の広場 第2号
中日新聞社	国際シンポジウム新安海底引揚げ文物報告書
朝鮮学会	朝鮮学報 第111輯，同第112輯
(財)古代學協會	古代文化 第36巻第9号～第11号，篠原A遺跡，重留A群第1号墳，本山遺跡発掘調査報告書，平安京左京三条三坊十一町
日本貿易陶磁研究会	貿易陶磁研究 第4号
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 第13号
京都市埋蔵文化財調査センター	平安京跡発掘調査概報 昭和58年度，中臣遺跡発掘調査概報 昭和58年度，音戸山古墳群発掘調査概報 昭和58年度，京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和58年度，長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第1集
向日市教育委員会	長岡京木簡一
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第12冊，同第13冊

舞鶴市教育委員会	志高遺跡―昭和56年度花ノ木・スドロ藪下地区および久田美地区の調査概要―，志高遺跡―昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要―
大江町	大江町誌 通史編 下巻
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料館報 第5号，特別展 丹後の弥生文化
京都府立山城郷土資料館	祈りとくらし
向日市文化資料館	常設展示図録 長岡京の歴史と文化
乙訓文化財事務連絡協議会	長岡京跡
口丹波史談会	丹波史談 第105・109・112・115・118号
大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会	大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書
中山修一	新版 長岡京発掘（NHKブックス464）
村川行弘	春日七日市遺跡―確認調査報告書―

—編集後記—

今年もあとわずかになりましたが，『情報』第14号をお届けします。

本号は福知山市石本遺跡が中心になっていますが，この遺跡からは大量の木製品が出土し，多くの資料が得られました。また，亀岡市北金岐遺跡も昨年度調査で木製の田舟が出土するなど，近年，注目を浴びるようになってきました。

府下遺跡紹介では，今年度，城郭を中心に紹介しておりますが，今回は，淀地域の城跡と御土居についてとりあげました。御土居は城郭とは言いにくいですが，近世初頭の建造物として意味のあるものなのであえてとりあげました。

（編集担当　土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第14号

昭和59年12月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）